## 創刊のことば

こころの未来研究センターは、2007年4月の設立から1年半を経た2008年11月、鴨川にかかる荒神橋のたもとに新築された京都大学稲盛財団記念館に研究の場を移すことになりました。センターのこの新しい門出を記念して、定期刊行物『こころの未来』を創刊いたします。

こころとからだ、こころときずな、こころと生き方。この3つの研究領域と、それらをつなぐ融合領域を探求のフィールドとして、センターに集う研究者は、日々多様な研究プロジェクトに取り組んでいます。この冊子には、その研究活動から生みだされた成果報告や研究論文、こころをめぐる研究エッセイ、対談など、さまざまな読みものが掲載されます。この冊子が今後末永く、こころの未来研究センターとこころに関心をもつ多くの方々とをつなぐメディアとして育ってゆくことを期待しつつ、創刊のことばといたします。

こころの未来研究センター長　吉川左紀子

こころの未来
KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY
2009 vol. 3

目次


| | | |
|---|---|---|
| 創刊のことば | 吉川左紀子 | |
| 01 | 巻頭言　粗食と粗音 | 細野晴臣 |
| 02 | インタビュー　精神的資源を育てる | 井村裕夫＋吉川左紀子＋平石界 |
| 10 | 研究プロジェクト紹介1　依存症に関する総合的研究 | 船橋新太郎 |
| 12 | 研究プロジェクト紹介2　ソーシャル・ネットワークの機能 | |
| | ——グループ内の「思いやり」の性質 | 内田由紀子 |
| 14 | 研究プロジェクト紹介3　〈モノ〉の表情・眼力の実証研究 | |
| | ——実験に至るまでの道のり | 渡邊克巳 |
| 16 | 論考　文明と子どもの命／親の“愛”——歴史と文学に学ぶ心理学 | 柏木惠子 |
| 22 | 論考　詩と絵とこころ | 松生歩 |
| 26 | 論考　2＋1——こころを支える3つの時間軸 | 友永雅己 |
| 30 | 座談会　変化するこころ、変化しないこころ | 木村敏＋河合俊雄＋鎌田東二＋畑中千紘 |
| 38 | 研究紹介　アフリカの森で考えるこころ観 | 大石高典 |
| 40 | 研究紹介　病気の子どもと日常を繋ぐ | |
| | ——院内学級と復学支援について スウェーデンの場合 | 近藤（有田）恵 |
| 42 | 座談会　ネット時代のこころを探る | 近藤淳也＋内田由紀子＋平石界＋森崎礼子 |
| 53 | センターの動向（2009.4 ～ 2009.9） | |
| 54 | 京都府との共同企画事業報告 | 鎌田東二＋船橋新太郎 |

音楽家
細野晴臣

Haruomi Hosono

巻頭言

# 粗食と粗音

1年ほど前にチャップリンの傑作、『モダンタイムス』を久しぶりに見て強く感じたことがある。そのころは世界中が金融危機に揺れていたので、映画の背景である1930年代の世界大恐慌と重なり、自分の音楽スタイルがいよいよ「不況」に適応していく予感を感じたのだ。ところがチャップリンにはほど遠く、自分はメタボであり、服にも穴が開いていない。そのギャップに違和感を覚えていた矢先に起こった激変を、この場に相応しいかどうかはさておき、記させていただく。

この20年ほど、ぼくは音楽を脳で聞いてきた。音楽ばかりではなく、食事も脳で食べていた。このことに気づいたのは、最近体調に異変が起きたからである。ぼくの場合、肉体的にはいわゆる生活習慣病からくる肥りすぎだったのだが、ついに限界を超え、結石などで痛みを伴い出したのだ。それで病院に駆け込むと、食事制限を指示されたのである。そこでやっと我が肉体を顧みたわけだ。それがきっかけでみるみる体重が減少し、幸い病気の世界に迷い込むことは回避できた。そしてつくづく自覚した。ぼくは脳みそを喜ばせるために食事をし、音楽を作っていたのだ、と。

スタジオにこもって音楽を作っているとき、ぼくは肉体感覚を忘れてしまう。トイレも食事も忘れてしまうので、身体が悲鳴をあげているのも聞こえなくなっていた。食事のときも同じように身体より脳みその喜びを優先してきた。身体の「もう充分」という声が聞こえず、ひたすら脳が満足するような食事をしていたのだ。

だが身体の言うことを聞くようになったいま、自分に必要な食べ物や音楽がいかに少ないかを痛感している。響いてくる食も音も少なく、栄養が足りない感じがする。しかし足りなければそれも良し。基本的には粗食そして粗音に親しむ、これが現在の心境である。

Interview : Hiroo Imura

# 精神的資源を育てる
メンタル・キャピタル

## 井村裕夫先生 インタビュー

現在、（財）先端医療振興財団理事長として日本の臨床研究の推進に努める井村裕夫先生は、京都大学総長のころ大学改革に取り組んで4つの新しい独立研究科をつくり、ポケット・ゼミを始めた。井村先生に、これからの医療や大学についてお話をうかがった。

聞き手
吉川左紀子 Sakiko Yoshikawa
（こころの未来研究センター長）
平石　界 Kai Hiraishi
（こころの未来研究センター助教）

### 日本の医療制度の3つの問題点

**吉川**　日本の病院は病気の治療という点でみると水準が高いけれど、こころが安らげる空間としてみたときにはあまり快適ではないという話をよく聞きます。先生はこうした点についてどのような印象をおもちですか。

**井村**　日本の病院は昔にくらべればずいぶん設備などもよくなりましたが、まだアメニティーがいいとはいえませんね。1992年、私が京大総長になって間もなく、アメリカの厚生長官が日本の病院を視察に来て対談したとき、いくつかの問題点を指摘しました。第1に、ホテルもオフィスもきれいなのに、どうして病院は汚いのか。第2に、医師や看護師の数がアメリカの病院に比べると5分の1から10分の1と少ない。数が少なければ、必ず問題が起こる。

最後に面白いことを言われたのが、日本ではかけ出しの医者でも練達の医者でも、手術料も診察料も同じ。アメリカでは勉強すればするほど収入が増えるから頑張る。日本の医者は何をモチベーションに頑張っているのかという質問でした。それは使命感だと説明しましたが、理解してもらえませんでした。しかし、このごろになって、日本も危なくなってきましたね。

**平石**　こころの未来研究センターの内田由紀子助教は文化心理学が専門で、アメリカと日本の違いを研究しているのですが、アメリカは個人主義的でインディペンデントな文化で、アジアは相互依存型でインターディペンデントな文化だといっています。相互依存型の場合は、社会の中で自分の責務を果たすことがモチベーションになるけれど、個人主義の場合は自分がうまくいくかどうかが大事なので、お金にならないのだったら頑張れないという話になります。日本では、同じグループの人が喜んでくれる、あるいは自分の患者さんが喜んでくれるために頑張るというのがあると思うんです。

**井村**　日本はアメリカのように個人主義ではないので、自分だけが突出して高い収入を得ることを望まない。そうなると、ジェラシーが働いていろんな問題が起こってくる。そのへんに文化の違いがあります。それも言ったんですが、余計わからなかったようです（笑）。

**吉川**　そうすると、日本のお医者さんが最善の医療をするためには、能力に応じて収入を増やすといったシステムを作ってもあまりうまくいかないかもしれませんね。

**井村**　そうですね。病院全体が評価されて収入が上がり、その中で適当な配分をするのがいちばんいいのでしょうね。

### 遅れている日本の臨床研究

**吉川**　先生が理事長をしていらっしゃる財団法人先端医療振興財団で取り組んでいる事業の枠組みは、井村先生がお考えになったのですか。

**井村**　そうです。先端医療振興財団では、医療機器の開発、医薬品等の開発、再生医療等の臨床応用の3つの分野において、基礎研究を実用化につないでいくためのいわゆる橋渡し研究を目指しています。中でも私がいまいちばん力を入れているのが臨床研究支援です。臨床研究というのは、病気の原因を解明して診断治療法を確立する研究で、医学の中ではいちばん大きな意味を持っています。それは大きく分けると、「disease-oriented research」（疾患志向型研究）と、「patient-oriented research」（患者志向型研究）の2つになります。

疾患志向型は、直接患者さんに対して研究を行うのではなく、患者さんから得た血液や細胞、遺伝子などを使ってする研究です。だから医者でなくても行えます。この分野は、山中伸弥さんのiPS細胞もありますし、最近日本もとても進んできました。ところが、患者さんを対象にした研究は非常に遅れています。

それを痛感したのは、1990年ごろ、アメリカの有名な雑誌『ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン』の編集委員をしたときです。これは「patient-oriented research」の論文だけを載せる雑誌です。しかも、アクセプトされる率が10%以下で、常に90%リジェクトするという雑誌なんです。日本から投稿された論文を見ますと、患者さんを対象に研究することに慣れてないので論文の内容がだめなんです。たとえば、動物実験は遺伝的にほとんど均質な純系動物を使うのですが、人間の場合は1%ぐらい遺伝子が違うために

先端医療センター
財団法人先端医療振興財団には、先端医療センター、臨床研究情報センター、クラスター推進センターの3つの組織がある（提供：財団法人先端医療振興財団）

臨床研究情報センター
基礎的な医学の研究成果を臨床の場に生かしていく橋渡し研究を推進するための情報拠点
（提供：財団法人先端医療振興財団）

遺伝的な背景が幅広い。そこで統計学的手法が必要になります。

その上、最近、発達プログラミングという考え方が出てきました。胎生期から生後一定期間の環境によってプログラムされ、それが遺伝子の発現を変えてしまうというものです。このように、1人ひとり環境が異なるので、多様な人を対象にして、ある薬が効くか効かないか、副作用はどうか、といったことを調べなければならない。これはいままでのように大学の研究室ではできません。もっと大規模に多くの人を使って、統計学的な処理をする必要があります。そういう訓練を私も受けてこなかったし、若い人たちにも教えてこなかった。そのことに初めて気づいたのです。

**吉川**　先端医療振興財団ができたのはいつごろですか。

**井村**　正式に設立されたのは平成12年（2000）です。当時はまだ文部省でしたが、臨床研究センターを大学につくって、患者さんを対象にした、国際的にも評価されるような臨床研究をやらないといけないということをかなり強く言ったのですが、文部省は予算がないということでなかなか実現しない。

京大を辞めた後、神戸市長から神戸医療産業都市構想を作りたいので計画してほしいと頼まれました。平成7年（1995）に阪神淡路大震災が起こり、それから3年後で、まだ神戸市の市民の収入はほかの府県の80%ぐらいでした。非常に躊躇しましたけれども、いままでやりたいと思ってできなかったことがここでできるかもしれない。もちろん、神戸市民のために役立つことが第1ですけれども、同時に、日本の臨床研究のレベルをあげるためにも役立つかもしれないと考えました。そこで、ある程度時間をかけて計画を練って、スタートしました。

先端医療振興財団の組織の1つに臨床研究情報センターがあります。ここは臨床研究を支援する組織で、現在、いろんな大学の50くらいの臨床研究を支援しています。日本は、いままで生物統計の専門家を育ててこなかったので、統計の専門家が足りません。そこで、ここへ来てもらって、どのぐらいの患者さんを対象にしたら結論が出せるか、どういうデザインをすればいい研究ができるのか、統計処理はどういうふうにやるのか、といったことを全部議論するんです。

患者さんを対象にした臨床研究は、人間全部を見ていかなければなりません。もちろん、人ですから、こころも持っています。その例が、偽薬（プラシーボ）が効くことがあることです。人間は1人ひとり違ったこころを持っていて、違った反応を示すので、本当の薬か偽薬かわからないようにして飲んでもらって効果を見るということもしなければなりません。

ある大学の有名な教授の研究を支援するとき、「なんでそんな面倒なことをしないといけないんだ」と担当者が怒られたことがあるんです。まずプロトコールを20～30枚書く。それに則って研究をする。そういうことはいままでやってきませんでしたから。でも、みなさん、だんだん理解してくれて、いまはスムーズに運営されています。

## 臨床研究に関する政策提言

**井村**　先端医療振興財団は1つのモデルとして注目されていますが、これだけではなかなか日本全体に広がりません。そこで、東京の科学技術振興機構の中にある「研究開発戦略センター」にもオフィスを設けて、臨床研究に関する政府への提言をしています。たとえば、研究費を増やさなければいけないとか、大学に臨床研究センターが必要だとか。おかげで全国の大学に10か所ぐらい臨床研究センターができました。規模は小さいが、一般の臨床の研究者が臨床研究とはどういうものか、だんだん理解するようになってきました。

**吉川**　いまは東京でのお仕事が多いのですか。

**井村**　そうですね。臨床研究を推進するには、患者さんに対する有効性と安全性をきちんと評価しないといけない。新しい薬や医療機器は厚生労働省の外郭団体である「医薬品医療機器総合機構」が審査して承認するのですが、なかなか通らない。専門家が少なくて、いままでは主に厚生労働省の人がやっていたのですが、研究開発の経験がないので、書類ばかり要求するのです。

**吉川**　何かをしようとすると、たくさんの書類がいるのはどこもいっしょですね。

**平石**　プロトコールも正しく評価できないし、統計的なこともよくわからないということになるのでしょうか。

**井村**　たとえば、神戸の先端医療センターが三菱重工と組んで新しいガンの放射線治療の機械を開発したときは、薬事法による承認に1年8か月もかかりました。途中でしびれを切らして、アメリカのFDA（食品医薬品局）に持っていったら、5週間で審査してくれてOKになりました。それでやっと日本も動きました。そこも変えないといけないというので、働きかけて定員増を実現させました。そんなふうに政策提言をやっていかないと、研究だけではなかなか進まない。何より大事なのは、患者さんを対象にした臨床研究を推進して、基礎研究の成果をできるだけ早く治療に役立つようにすることです。

**吉川**　日本人はもともとチームワークが得意なはずですが、ひとつの目標に向かって複数の組織が力を合わせて動くといった場面での意思決定は、アメリカ型の社会のほうが、効率的に目標に向かうことができますね。

**井村**　日本人は戦略的に行動するのが下手です。

**平石**　アメリカ人はシステムをしっかり作ってやりますが、日本人は場当たり的に解決していくのが得意なようですね。

**井村**　日本の学者はまさにそう。厚生労働省なんかも同じですね。

## 教養教育の改革から生まれたポケット・ゼミ

**井村**　最近、イギリスが未来予測をやり始めました。科学技術の面で最初に未来予測を始めたのは日本だったんですが、やり方が違う。日本はデルファイ方式といいまして、ギリシャの「デルファイの神託」から取った言葉ですけれども、ある技術はいつごろ実現するかといったことを有識者に手紙を出して聞くんです。それを集計して、こういう結果でしたといってもういっぺん手紙を出して確認する。そういうことを日本はずっとやってきたんです。

一方、イギリスは「シナリオ・ドリブン」といって、たとえば「地球の人口がこのまま増えれば、50年先には95億人になるだろう」と、ほぼ確実と考えられることを取り上げて、それに対してどんなシナリオで挑戦していけばいいかを検討します。ある意味で、未来から現在を振り返る歴史をやろうとしている。

1年生対象のポケット・ゼミの様子（正高信男京大霊長類研究所教授／センター連携研究員）

イギリスでは、チーフ・サイエンティストといって、政府の施策に対するアドバイザーがいます。1960年代からチーフ・サイエンティストを選んで、その人が自分のスタッフを持って、いろんな省に声をかけながら国の科学技術政策を決めています。日本と違うのは、イギリスのチーフ・サイエンティストも、アメリカの科学補佐官も、中心となる顔があることです。日本は総合科学技術会議議員がいますが、常勤議員が4人いて誰が中心かわからない。

**吉川**　日本とイギリスはどちらも先進国の一員という点ではあまり違わないけれど、日本では、仕組み全体を変えていく力というか、ポテンシャルが何か弱い気がしています。

**井村**　そうですね。理由の1つは教育にあると思います。オックスフォードやケンブリッジは、1対1や1対2の個別指導をしています。私が総長時代にやりたかったことの1つが、教養教育の改革です。昔は、高等学校が教養教育で、大学が専門教育とはっきりしていました。ところが、戦後の学制改革で非常にあいまいな形で、教養教育と専門教育を2年・2年で継ぎ足したのです。

私が総長になったときには、すでに教養部を廃止して、総合人間学部を作ることが決まっていたので、それは撤回できませんでした。この機会になんとか教養教育をよいものにしようと思って努力しましたが、任期が終わる前に1つだけ実現したのが、新入生を対象にして10人の小さなゼミをやることでした。

**吉川**　「ポケット・ゼミ」ですね。

**井村**　誰かがそう名づけてくれました。高校から大学に入ってきて、いきなり教養部で500人を対象にした講義を聞いたら、たいてい嫌になるだろうと思ったのです。せめて1対10ぐらいのゼミで、少しでも学問の面白さや知的興奮を味わってほしいと考えました。

**吉川**　私もここ数年ポケット・ゼミをやっていますが、この授業は新入生に大変人気があるようで、担当される先生も増えています。

**井村**　教育の原点は、ある意味で若い人たちの知的好奇心に火を付けることでしょう。原書を読ませてもいいし、山へ連れていって植物を見せながら講義をしてもいい。何でもいいから10人を1学期預かってほしいと提案したのは、そこに教養教育の原点があると思っ

たからです。

## 全学の学生にこころについての科学的知識を

**吉川**　こころの未来研究センターは「こころの科学入門Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」という3つの講義を全学生向けの共通科目として、複数のスタッフで担当しています。教員の負担は大きいともいえますが、学生たちは大変意欲的で一生懸命聞いてくれるので、逆に刺激を受けることも多いですね。

**井村**　皆さん、教養教育はサービスだと思っているんです。だから、できるだけ負担を軽くしたい。総合人間学部ができると、その先生方も専門の学生を持てるわけです。もともとみんな専門家ですから、そっちのほうに関心が強くなります。だから、教養教育は片手間で、空いた時間でやることになってしまう。ここは大変難しい問題ですね。もう一度考え直さないといけないと私は思っています。

総長のころもいろいろ試みましたけれど、あまりうまくいきませんでした。文部省からお金を取ってきて、教養教育でコアとしてどうしてもやらないといけないところと、自由に選択させていいところを決めてほしいと言いました。京都大学の先生だけだとたぶんまとまらないので、東北大学、早稲田大学などいろんなところから来てもらったんです。2年やって、やっぱりコアなんて必要ありません、というのが結論です。コアはだれも本当はやりたくないんでしょうね。

初めて教養教育の内容を見て愕然としたのは、学生食堂のメニューのようで、何がいちばん大事なのかがわからない。私は、教養教育は、コアとしてやらないといけない部分と、自由に選択させていい部分があると思います。たとえば医学部に来る人はこれとこれは取りなさいというのはやはり必要だと思います。将来を考えると、心理学も必要です。

**吉川**　そうですね。

**井村**　生命科学もあらゆる分野に行く人に必要でしょう。生命の理解なくして人類の未来はない、と私はいつも言っています。そういう理念で教養教育がやれないと、何となくあまりおいしくなさそうだと思ってだれも食べないということになります。

**吉川**　本当に、言われるとおりです。

**井村**　だいたい理系に行く人は、大学受験のときに、生物は点が取りにくいから受験科目から外して、物理とか化学を選択して入ってきます。入ってからも、生物なんて取りませんよね。だから、どうやったらいいのかはなかなか難しいですが、教養教育をもう一度やり直さないといけない。私も数年かけてやりましたけれども、なかなかうまくいかなくて、結局、ポケット・ゼミで終わったのです。

## 医師と患者が1対1で向き合う

**吉川**　専門の違いにかかわらず、すべての学生が常識としてこころの科学的知識をもって大学を卒業するといいのではないかと思っています。心理学の場合、そのコアな部分を基本として知っていると社会に出ても役立つことがとても多いと思うんです。その部分を、大学の1、2年生の間に習得する。たとえば、人とのコミュニケーションの基本的な部分にどのような原理があるかを脳科学などとむすびつけながら理解しておく。人とやりとりするうえでどういう心遣いが必要か、それはなぜかといったことも、科学的知識に基づいて誰もが知っていたほうがいいと思います。

**井村**　それは非常に大事ですね。私はいま、病院の若い医師たちの患者さんへの接し方に危機感を感じています。私が大学を卒業したころは、患者さんから十分話を聞いて、体をくまなく診察して、少しでも多くの情報を得て診断しようと努力しました。そのことで医師と患者さんの距離は非常に近くなり、患者さんも本当に診てもらったという感じがして安心する。

いまは科学としての医学がものすごく進みましたから、血液検査やMRIの結果を見れば、ほとんど診断ができます。医者は検査結果だけに関心を持ち、患者さんがどう感じているかに関心が向かない。もっと患者さんのこころを理解できる医者を作っていかなければいけないと思います。

このごろ、病院に行った人、みんなが言う不満はそれです。診察室へ入っていくと、医者はコンピューターの画面ばかり見て、コンピューターを打って、顔も見てくれない、手も握ってくれない。これは医療にとっては大変大きな問題です。

人間はこころとからだの両方があって、その間に複雑で密接な相互作用があります。そういうことを全体として理解する必要があるのに、科学としての医学があまりにも目覚ましく進歩して、医者もそればかり見ている。医療の原点は、医師と患者さんが1対1で向き合うところにあります。

**平石**　それこそ、先生が最初におっしゃったペーシェント・オリエンティッドな研究で、患者に対してきちんと触診する場合としない場合で効果が違うという研究もできますね。

**井村**　そうです。おそらく違いが出るでしょう。だからいま、医学の教育は大きな転機だと思っています。

**吉川**　最近、ある病院で、看護師さんと患者さんのコミュニケーションの調査をしました。そこで話を聞くと、たとえば、若いお医者さんがリストを読むように早口で患者さんに指示したりすることがある。それを、お年寄りはなかなか理解できなかったりするので、看護師さんたちがあとでフォローしないと患者さんが落ち込むと言われていました。

**井村**　医学の教育を変えていかなければいけないでしょうね。臨床心理の専門家が医学部にいないのは1つの問題です。医師・患者関係をきちんと教えないといけない。どうしたら患者さんに安心感を与えられるか、患者さんにどう接すればよいかということをね。アメリカはある程度やっています。

**吉川**　そうですか。

**井村**　それは訴訟を避けるためでもあるんです。日本でもだんだん医事訴訟が増えていますが、それはやはり医師・患者関係に起因するところが大きいようです。

**吉川**　患者さんがお医者さんを訴えるということは、20～30年前は、今ほどはなかったですよね。

**井村**　なかったと思います。かつてはパターナリズムというか、医者が「全力を尽くしますから任せてください」と言えば、患者さんは「お願いします」と言っていた。いまはインフォームド・コンセントの時代になって、たとえば「この手術の死亡率は10%です」なんて言われるので、患者さんはびっくりするわけです。確率としては10%でも、患者さんにとってはオール・オア・ナンですから、そんな数字の意味をまず十分理解させないといけないのに、いきなり数字を言う時代になってきている。

**吉川**　インフォームド・コンセントは、欧米のシステムを日本に取り入れたのですね。欧米でうまくいっているやり方でも、日本人のこころにはぴったりとは合わないものがある。

**井村**　そうですね。1960年代にアメリカで人権運動が活発になって、医師と患者は対等の立場である。あらゆる情報を患者さんに開示しなさいということになってきて、インフォームド・コンセントが始まったんです。ただ、アメリカでも、インフォームド・コンセントの効果は、医師・患者の間に信頼関係が成り立っているときに最も大きいと言われています。

**平石**　インフォームド・コンセントでは、先ほどの何パーセントという表現をどれだけ理解してもらえるかという問題がありますね。

**井村**　これは難しいですね。

**平石**　心理学では「基準率の誤り」という話があります。ある病気にかかっていると、80%の確率で陽性反応が出るとします。そういう病気でも、もともとの罹患率が非常に小さいと、仮に陽性反応が出たとしても、実際に罹患している確率は10%未満になるのです。でも、直感的には、陽性反応が出たら、8割がた病気にかかっているように思ってしまうという話です。だから心理学者も、どういうインフォームド・コンセントをすると直感的に理解しやすいかなど、手助けできることはあるし、するべきかもしれません。

**井村**　それはしないといけないでしょうね。そうでないと、一般の人たちはなかなか理解できないと思います。

**吉川**　病気のときは、ふだんより気持ちも弱くなっていますから、普通に聞いたら聞き流すようなことでも、こころの負担になることがありますね。

## 総長時代につくった4つの独立研究科

**吉川**　先生は1991年に京大総長になられ、それから17～18年経ちますが、もしいま先生が京大におられて、何か大学の改革をと言われたらどういうことをなさりたいですか。

**井村**　私がいたころといまとはかなり違います。私のころは総長の選出法から違っていました。立候補制でも推薦制でもなくて、いきなり選挙をするのです。すべての教授に被選挙権があって、第1回目は助手以上が投票する。第2回目になると、専任講師以上が、上位15名から絞っていくんです。

いざ総長に就任してみると、補佐体

井村裕夫（いむら・ひろお）
プロフィール
財団法人先端医療振興財団理事長。1931年滋賀県生まれ。京都大学医学部卒業。内科学とくに内分泌代謝病学を専攻。京都大学医学部教授、同医学部長等を経て、1991年～1997年京都大学総長を務める。その後、神戸市立医療センター中央市民病院長、総合科学技術会議議員を経て2004年より現職。京都大学名誉教授、稲盛財団会長、科学技術振興機構顧問、日本学士院会員、米国芸術科学アカデミー外国人名誉会員。著書に『最新内科学体系（全80巻）』（編著、中山書店）、『人はなぜ病気になるのか』（岩波書店）、『医のフィリア』（中山書店）など。

制はまったくありませんでした。本部でたった1人。あとは事務局だけ。何もしないでいれば、事務局が文部省の言うとおりにやってくれます。しかし、何か違うことをやろうとすると、1人で困るわけです。そこで、「副学長を置きたい」と部局長会議に提案したんですが、最初はほとんどの学部長は反対でした。

**吉川**　どうしてですか。

**井村**　総長が強くなると、学部自治を犯すという理由からです。総長を強くするのはよくないという考え方が当時は強かった。私も、総長が学部まで手を入れるのはよくないと思い、学部のことはすべて学部教官に任せて、学部と学部の間にまたがることはすべて本部でやることにしました。

そこで、将来構想委員会を立ち上げ、未来に向けて学際的な分野を作っていこうということで、4つの独立研究科をつくりました。情報学研究科、生命科学研究科、エネルギー科学研究科、文系としてアジア・アフリカ地域研究科です。

**吉川**　先生が作られた4つの研究科は、どれも時代の先を読んだ研究分野ですね。

**井村**　これから必要な学問だと考えた結果です。日本の学部は、基本的に明治以来あまり変わっていないんです。情報がすごく大事になってきたのに、日本では情報のことは主に工学部でやっていました。工学部はどうしてもハードウエアですから、コンピューターを作るほうに関心が行きます。しかし情報の本当に大事なところはソフトウエアです。そうすると、工学部だけでなく、理学部の人とか、いろんな学部が参加して新しいソフトを作らないといけない。

**吉川**　生命科学に注目したり、アジア・アフリカに着目したりというところが先生ならではですね。

**井村**　医学部は自然科学でありながら、人文学的な要素があります。だから理系の卒業生で作家をたくさん出すのは医学部じゃないでしょうか。加藤周一さん、安部公房さんも医学部でした。

大統領就任式で就任演説を行うオバマ大統領（2009年1月20日）（提供：EPA＝時事）

人間を対象にしているのが、ほかの理系と違うところかもしれません。

## メンタル・キャピタルを育てる

**吉川**　先生からご覧になって、学生や若い研究者、あるいは私の世代の研究者に、もっとこういうふうに発想してやった方がよいと思うところがありましたら、ぜひお聞かせください。

**井村**　学生に対しては、学問の面白さとか知的興奮をできるだけ与えることによって、学問の世界に関心を持つようにすることがいちばん大事です。教員は、未来の社会を担う人を育てるわけですから、自分自身も少し未来を見ないといけない。でもこれがなかなか難しい。

日本の研究者は、自分の領域にこもるので幅が狭くなってしまう。ある程度幅を広げて、これからの人間社会を見すえて、何が大事かを考え、自分が学問の世界の座標軸のどこにいるのかを常にチェックしながら仕事をしていくことが必要だと思います。

現在、時代がものすごく変わりつつある。それはオバマさんがアメリカ大統領になって、オバマ流の政策を打ち出していることからも明らかです。大きな経済危機が来て、お金の豊かさというものは極めて危なっかしいものだとよくわかった。そして、物=マテリアルについても、地球上の人口がどんどん増えて、みんなが同じように物を持とうとしたら、1人が持てる量は限られてきます。グローバル化と同時に個別化も必要で、自分の国の未来を見ながら、同時に世界全体を見て、どの方向にこれから研究をしていけばいいかを考える。研究者もそういう大きな視点をもってほしいですね。そうすると、こころの問題は非常に大事ではないかと思います。

今回の経済危機で明らかになったのは、アメリカの一極集中による世界支配はもう完全に終わったということですね。そうすると、世界は多極化する。その中で日本のこれからの方向、世界全体が目指すべき理想の方向は何かを考えていかないといけない。その中で大切なことは、国が知の富、いわばメンタル・キャピタル（精神的資源）をどうやって育てていくかです。

先ほど言いましたように、物質代謝の面では発達プログラミングということが注目されるようになりました。その理由の1つは、出生時に体重が小さかった子どもに肥満や糖尿病が多いからです。お腹の中にいるときの栄養状態が悪いと、そういう環境でも育つようにプログラミングされるので、生まれてから栄養を十分与えられると肥満や糖尿病になるという考えです。

同様に、メンタルなほうも確実にプログラミングがあると思います。昔から胎教の重要性が言われますが、胎生期に母親の状態がどうだったのか、ストレスはなかったか、何か特定の化学物質に曝露されたか、生まれたあと母親が子どもとどう接したかで、かなりプログラミングされるのではないか。そういうことをもっと調べて、世界の人たちのメンタル・キャピタルを大きくしていくことは重要だと思います。

## こころは科学的な方法でわかるか

**吉川**　日本人は、大局的な判断が不得手で、下手をすると細かいところにどんどん入ってしまうという欠点がありますが、別の見方をすれば繊細で、細やかで、優しい。粘り強く目標に至る努力をする。そういうメンタリティを昔から持っていたのではないかと思います。それをどこで間違えたのか、アメリカ・モデルに少しシフトしすぎてしまった。

**井村**　オバマさんが出てきたのが、そのアメリカ・モデルが破たんした証拠ですね。日本としても大事なことは何かをよく考えていかないといけない。大学にとっても将来の方向を見ながら、新しい芽を育てていくことは重要です。そういう意味でも、「こころの未来研究センター」は非常にいい組織であって、いろんな人たちが自由に議論できるオープンな場を作ってほしいと思うんです。

**吉川**　私は、ちょっと大雑把な表現ですが、からだについて言えることは、こころについても同じように言えると思っています。医学の領域で必要な仕組みは、たぶんこころの領域や教育でも同じだと思います。

**井村**　そうですね。12年前、京大の100周年記念でシンポジウムをしたときに大問題になったのが「こころ」でした。近代科学の方法論でこころはわかるのか、わからないのか。利根川進さんは、「近代科学の方法論でこころはわかる、少なくともわかると思って私は研究しています」と言う。ギリシャ哲学の藤沢令夫先生は、「そんなもの、絶対にわからんよ」ということになって、2人の激しい議論でシンポジウムは終わったんです。いま、科学的な方法でわかることは確実に増えてきましたが、思想や哲学、人間の創造性など、簡単にアプローチできないもの、わからないものはどうしても残ります。だから両方のアプローチをやっていかないといけない。

私は学際領域をつくるときに、こころの問題も考えないでもなかったんです。医学部長をしているときに、高次脳機能の独立専攻をつくりました。それは形態学、生理学、臨床医学で、高次脳機能の研究をやる組織です。でも、いまのところ、こころに迫るアプローチがあまりにもたくさんあって、接点が必ずしも多くない。そういう状況なので、こころの問題はもう少し先だろうと思っていたんです。だから、こういうセンターができたのは非常にうれしいことです。

**吉川**　脳科学は急速に進歩しましたが、こころはまだわからないことが多いですね。

**井村**　平石先生は進化生物学をやっておられるそうですが、そういった見方も大事だと思います。ダーウィンの『人間の由来』（1871年）を見ると、人間の精神機能も進化に由来すると書いています。人間の精神機能の萌芽的なものはチンパンジーも持っている。それが進化の過程で、現生人類が現れた数万年前に爆発的に進んで、絵画や音楽、ダンスが生まれたりして、やがて抽象的な思考ができるようになり、文字が作られて、哲学や思想が生まれてきたのだろうと思います。そういう全体の流れを見ていくことは非常に大切です。

**吉川**　うちのセンターでは、芸術のところまではまだ十分に扱えていないんですけれども、先生がはじめにおっしゃったペイシェントオリエンテッドというところに、1つ手がかりがあるような気がしました。

**吉川・平石**　本日は貴重なお話をありがとうございました。

こころの未来研究センターがある京都大学稲盛財団記念館

研究プロジェクト紹介 1

# 依存症に関する総合的研究

船橋新太郎（こころの未来研究センター教授）
Shintaro Funahashi

## 物質依存と過程依存

依存は、物質依存と過程依存の2種類に大きく分類されている。アルコール、覚せい剤、シンナー、ニコチンなどの薬物に対する依存は物質依存の代表的なものであり、特定の物質に対する欲求が異常に亢進した状態である。依存症と言えば一般的には薬物依存を思い起こさせる。薬物依存の生物学的なメカニズムについては、膨大な数の研究結果が蓄積されており、主として脳内に存在するモノアミンやカテコールアミン系の機能異常により説明されている（詳しくは松岡俊行氏の解説*1を参照）。薬物依存の恐ろしさや危険性はいろいろなメディアを介して紹介されており、また薬物依存からの回復プログラムも多くの病院や施設で提供されている。

一方、様々な新しいメディアや機器の登場とその急速な普及により、携帯電話依存症、ゲーム依存症、ギャンブル依存症など、様々な新たな依存症が生まれている。これらの依存は過程依存に分類され、特定のものに対する欲求の亢進ではなく、特定の行為とその結果に対する欲求の亢進である。薬物依存などと同様に、新しい機器やメディアを利用して楽しむ段階を越えて、それなしでは日々の生活を円滑に営めないだけでなく、それによって自己の生活を破滅させる例が見られている。携帯電話、ゲーム、インターネットなどへの依存はまだ大きな社会問題となってはいないが、パチンコを中心としたギャンブル依存は大きな社会問題となっている。

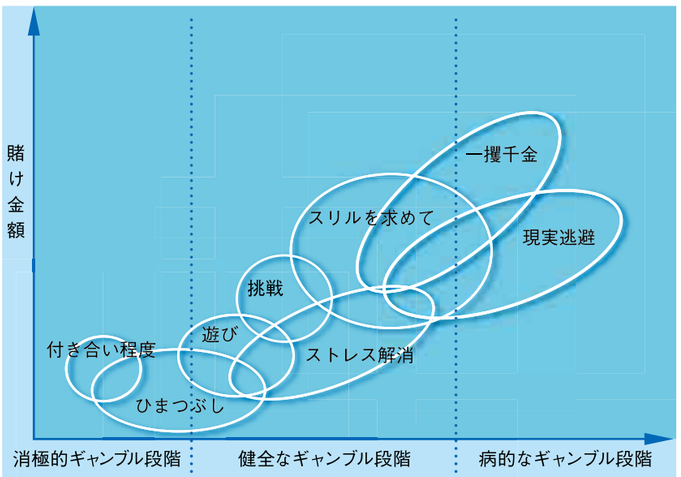



図1　ギャンブルに対するはまり度、賭け金額と、内面的動機との関係
（谷岡一郎『ギャンブルフィーヴァー：依存症と合法化論争』p. 40の図1を一部改変）

## ギャンブル依存症

ギャンブル依存に関する欧米での調査では、成人人口の1～2%がギャンブル依存症と言われ、その数字を日本の人口にあてはめると200万人近い人たちがギャンブル依存症と推定されている。日本では競輪・競馬・競艇などの公営ギャンブルに加えて、民間業者の経営するパチンコ店が国内の至る所に存在し、ギャンブル依存の原因の大部分はパチンコによるものであると言われている。ギャンブル依存は、それが病的で、社会生活上問題を生じるようなレベルになると（たとえば、返済可能性を大きく越える借金、失業、離婚、家庭崩壊など）、単なるギャンブル好きではなく、精神疾患の1つとしてのギャンブル依存症と呼ばれるようになる。

**図1**は谷岡による病的なギャンブル依存への道筋を示したものである*2。最初は遊びやひまつぶしやストレス解消のためにしていたギャンブルが、一攫千金を求めて行うようになると、病的なレベルに限りなく近づいてしまう。病的なギャンブル依存の診断の決め手として、常にギャンブルが頭から離れない、賭け金を増やさないと満足できない、やめようと思ってもやめられない、やめているとイライラする、ギャンブルで使うお金を得るために他人のお金に手を出す、あるいは違法行為をする、ギャンブルのために仕事を放り出す、ギャンブルをしていないと嘘をつく、などが挙げられているように、ギャンブル依存症の人の行動は薬物依存症の人の行動に酷似している。

ギャンブルに対する依存は、薬物に対する依存とは別の新たな社会問題であり、これを放置することにより大きな社会的損失が生じることになる。したがって、このような依存症がどのような仕組みで生じるのか、薬物依存と同様のメカニズムが関わっているのか、どのようなプロセスを経て重度の依存症に至るのか、重度の依存症から抜け出すにはどのようにすればよいのか、重度の依存症の人に対してどのような支援が必要なのかなど、ギャンブル依存症に関する基礎的・臨床的研究の推進とともに、その防止と改善のための対策の立案が急務である。そこで本連携プロジェクトでは、ゲームやギャンブルに対する依存症の生物学的な要因に注目し、このような依存症に陥る仕組みに関する基礎的な研究を実施することを計画した。

## ギャンブル依存症に関する研究

研究の実施にあたっては、まず依存症に関する社会的な問題や既知のメカニズムを明確にする目的で、平成18年（2006）より研究会を開催し、福井裕輝氏（国立精神・神経センター）からは薬物依存の神経基盤について、松岡俊行氏（京都大学）からは依存症の薬理学的側面について、また、谷岡一郎氏（大阪商業大学）からはギャンブル依存の社会的問題点について、村上幸史氏（神戸山手大学）からはギャンブラーの賭け行動の特徴について、話をうかがった。また、平成19年（2007）には「依存症を知る」と題するフォーラムを開催し、精神医学、神経科学分野の研究者とともに、依存症の生物学的要因や社会的な問題の理解と、その防止と改善への取り組みを考えた。さらに、平成20年には「依存と自立」というテーマでフォーラムを開催し、国内でギャンブル依存症からの回復施設を運営している中村努氏（ワンデーポート）と、米国でギャンブル依存症患者の治療にあたっているJames Whelan氏（メンフィス大学）を迎えて、ギャンブル依存症の診断・治療・支援の具体的な方法やその日米での考え方の相違、さらに、谷岡一郎氏を交えて、依存症研究の今後のあり方について討論を行った。

ギャンブル依存は大きな社会的問題であるにもかかわらず、それに関する基礎的研究はもちろん、臨床的研究も著しく少ないことが明らかになった。そこで、ギャンブル依存の生物学的メカニズムの研究の推進はもちろん、その治療法の確立に向けた研究を進める必要がある。一方、ギャンブル依存からの回復を支援する組織や施設の設置、また回復のためのプログラムの整備もほとんどなされていないことが明らかになった。そこで、このような精神疾患の存在に対する社会の理解と、それからの回復に向けた社会からの支援・救済システムの構築も必要である。人間のもつ欲望を制御し、皆が健全で充実したこころで毎日を送るためには、基礎科学・臨床科学と社会科学が一体になったこのような研究が必要である。

図2
こころの未来フォーラム『依存症を知る』のポスター

図3
こころの未来フォーラム『依存と自立』のポスター

**参考文献**

1　松岡俊行「『依存症：溺れるこころ』を探る」こころの未来、vol. 2、26-29、(2009)。

2　谷岡一郎『ギャンブルフィーヴァー：依存症と合法化論争』中公新書、(1996)。

研究プロジェクト紹介 2

# ソーシャル・ネットワークの機能
## ――グループ内の「思いやり」の性質

内田由紀子（こころの未来研究センター助教）
Yukiko Uchida

対人関係は幸福の源になる反面、強いストレス源ともなりうることが、多くの研究により指摘されている。一見自明のことのようでもあるが、良い対人関係が主観的幸福感、病に対する対処行動、身体的な健康などと強く結び付いていることを示す研究報告から、社会の中で生きる人間にとっての対人関係は一種の「資源」であることがあらためて理解できる。これを、「社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）」として研究する動きはいろいろな研究分野で見受けられる。

本研究の最も大きな目的は、人と人とのつながりや、相手に対する「思いやり」がうまく機能する場面とはどういったものであるのか、「資源」として機能しているネットワークはどのような性質をもっているのかを探ることである。

### 普及指導員の役割

その中で現在特に着目しているのが農村コミュニティーのネットワークであり、そのネットワークの生成・維持に貢献している「普及指導員」の役割である。

昨年度、近畿農政局から、普及指導員という専門職の人たちが農村の中で果たしてきた役割について知ってもらいたい、という依頼があったことに端を発し、「普及指導員とは何か？」について勉強し始めることとなった。全国普及改良支援協会のホームページ (https://www.ek-system.ne.jp) には「普及指導員は、農業経営と農村生活の向上に取り組む農業者の様々な活動を支えています」とあり、その役割には地域の担い手の育成、産地のサポート、地域振興などのサポート事業が挙げられている。とりわけ、「普及指導員は、こうした産地を発展させたり、新たな産地を作るよう農業者等を仕向けたり、さらに地元の農協や市町村と連携して、農業者の組織化支援などのコーディネート活動を行っています」という記述には、普及指導という仕事が日本の農村コミュニティーにおいて人と人のこころを「つなぐ」役割を担ってきた職務であることが示されている。「人とのつながり」を資源として活かす専門家ということで、心理学の立場からこの仕事の持つ機能や意義に注目してゆくことになった。

近畿農政局の普及課の協力で、農業現場を訪れ、実際の普及指導員がどのようなビジョンをもって「つなぐ」仕事を行っているのかを知る機会があった。また昨年10月の普及事業60周年記念シンポジウムでは吉川左紀子センター長が「信頼形成のコミュニケーション：心理学の知見から」というタイトルで講演を行った。筆者もパネルディスカッションのコメンテーターとして参加し、近畿6府県の数多くの普及指導員の方々と意見交換を行う機会を得た。

2008年10月に行われた普及事業60周年記念シンポジウム
（提供：近畿農政局福田尚子氏）

農業を営む人たちや消費者に直接働きかけて、農村集落というコミュニティー集団への貢献意欲を高め、集団のメンバー間の信頼形成にも力を尽くす、ベテランの普及指導員のスキルは並大抵のものではない。本プロジェクトでの取り組みを通じて、普及指導員の人たちが長年経験を積む中で培ってきた、「人のこころを動かすスキル」を明らかにすることをめざしたい。現代の日本社会において、「つなぐ」仕事は学校や医療現場など、様々なところで必要とされており、普及指導員が持つスキルを解明し、またそのトレーニング法を開発することは、今後重要になるに違いないと考えるからである。

### 現在のプロジェクト実施状況

普及事業60周年記念シンポジウムの後、参加した普及指導員の方から、「普及指導員が行っている『つなぐ』仕事の役割を具体的に心理学のデータで示すことは可能なのだろうか？」という意見が寄せられた。「つなぐ」仕事の成果は、経済的効果などの尺度では計測できず、それゆえに地域の活性化や農村ネットワークの形成といった「こころの働き」についての実績は外に表しにくい現状があるという。一方、私の専門である心理学は、目に見えないこころの働きをデータで示すことができるところにその強みがある。文化心理学者として、日本社会・文化の基盤となっている農村コミュニティーのネットワークの成り立ちと、それを支える人々の役割に強い関心を持っていたこともあり、普及指導員の行っている仕事を目に見える形にすることをめざした連携プロジェクトを実施することになった。現在、近畿農政局と近畿ブロック普及活動研究会の協力のもと、近畿6府県の普及指導員を対象にウェブ調査を実施している。

### 今後の展望

今年度は近畿における調査結果をまとめ、まずは普及指導員やその組織が持っている資質、長所などが、実際の農業生産だけではなく、地域づくりなどにどのように活かされているのか、その成果を具体的なデータとして示すことを目標としている。さらに、近畿の普及組織で活用してもらえるようなデータ（普及指導員が持つスキルとその特徴についてのモデル化や、事例タイプ別の有効解決方法を明らかにするなど）をフィードバックすることを目指している。来年度は全国規模での調査を立ち上げることも視野に入れている。

普及組織へのフィードバックとともに、学術的な貢献も行っていきたい。具体的には、農村コミュニティーの社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）の役割と、日本の農村文化における対人関係の特徴などについて明らかにしたうえで、人のこころのつながりがどのように形成され、地域社会でどのような機能を果たしているのかを明らかにしていきたい。「農」という生業が日本の社会構造に果たす役割や、これまで直感的かつ素朴に理解されていた「相手からの思いやりを肯定的に受け取ることができる背景」とは何かという対人ネットワークに関連する視点、そして信頼を形成するためにはどのようにすればよいのか、というコミュニケーションについてのより詳細な理解を進めることを目指している。

このような研究プロジェクトは、「心理学に対する期待、要請」に対して、「学術研究を通じて解を見いだし、その成果をフィードバックする」という、こころの未来研究センターならではの連携事業の1つのモデルケースとなるのではないだろうか。ともすれば研究のための研究となりがちな中で、心理学に対する要望からヒントやアイディアを受け取り、それを学術研究として構成し、フィードバックを行うという形が、これからの心理学研究においても重要なフィールドとなることを期待している。

2008年8月、東近江市和南の池田牧場にて、滋賀県農業技術振興センター上田普及部長（当時）より説明を受ける（提供:近畿農政局福田尚子氏）

東近江市杠葉尾（ゆずりお）集落における和牛放牧　牛を借りてくる「レンタカウ」により、獣害が減るだけでなく、牛の世話のために人々が集まってくるという効果もあるという

研究プロジェクト紹介 3

# 〈モノ〉の表情・眼力の実証研究
## ――実験に至るまでの道のり

渡邊克巳（東京大学先端科学技術研究センター准教授）
Katsumi Watanabe

### 〈モノ〉にこころを感じるのは何故？

「こころを込める」という表現がある。国語の音読で「もっとこころを込めて」と言われれば、たいていの小学生は「もっと感情豊かに」読むということだと知っていて、かつそうすることができるだろう。ホテルのドアマンがこころを込めてドアをあけるときは、「相手のことを考えて」ドアを開けることによって、言葉や動作の質が上がるということが暗に示されている。発言や動作の主体が明示的なため、発話や動作のような〈コト〉にこころを込めるというのは分かりやすい。

しかし例えば、こころを込めた贈り物とか料理とは何だろうか？　相手のことを考えて選んだ・渡した贈り物／作った料理という側面は確かにあるだろう。しかし、そのような〈モノ〉は、こころを込めた主体が目の前に存在しなくても、また受け取り側に主体がはっきり分からなくても、さらには受け取り側が不特定多数でも可能である（ような気がする）点で、こころを込められた〈コト〉とは微妙に異なる。こころを込める主体から離れた〈モノ〉に何か変化がある（ような気がする）。

ココロを込めた〈モノ〉は質が変わるかという問いはともかく、ヒトは〈モノ〉にこころを込め続けてきた。あるいは受け手は〈モノ〉にこころが込められていると感じ続けてきた。このような凡庸な直感は、センターのプロジェクトの1つである「京都における癒しの伝統とリソース」に参加するなかで、〈モノ〉にまつわる様々な歴史や縁起の知識を、河合俊雄先生、鎌田東二先生、吉川左紀子先生、駿地真由美先生などから詰め込まれたことによって強くなり、「〈モノ〉にこころを感じるのはなんで？」ということになった。

仏像の多様性
左上　八臂弁財天像（長建寺蔵）　右上　洞の地蔵（法然院蔵）
左下　十一面観音菩薩像（法金剛院蔵）　右下　阿弥陀如来坐像（法然院蔵）
（撮影：水野克比古）

### 〈モノ〉の力に対する実証的な検討

さて何から始めるべきか。一応自分の専門の認知科学・認知心理学の範囲でやるためには実証研究じゃないと。あとは調べる範囲も限定するほうがいい。京都だし仏像なんかどうだろう？　仏像に感じるココロの研究？　まだ広いなあ。それに深すぎる。戦略的な浅さが欲しい。じゃあ〈モノ〉としての仏像の視線とか表情ってことでどう？　あ、それで行きましょう。……というような議論（？）がプロジェクトに関わる人たちのなかで交わされ、「仏像等に代表される〈モノ〉に転写したものとしての表情・視線の研究を、人間の認知の基礎的研究の立場から分析することによって、心理的・宗教的・文化的な絆となりうる〈モノ〉の特徴を実証的に探る」というはなはだカッコイイ目的を持つ「〈モノ〉の表情・眼力の実証研究」が平成19年度からスタートした。

表情や視線の古典的な実験心理学には単純に検出・弁別を扱うものが多かったが、表情や視線を受ける側がどのような影響を受けるかという研究が、近年さかんに行われるようになってきた（共同注意や表情の伝播など）。しかし、表情や視線を統合することによって生まれる気配や持続的な魅力に関しては研究が少ない。この研究では、例えば「眼力」のような感覚が、観察者にどのように感じられているのかなどを調べるとともに、そのような感覚が仏像のような〈モノ〉に吹き込まれてきた過程などに関しても、実際の仏像やその縁起などとつきあわせることによって研究を進め、心理的・宗教的・文化的な絆となってきた〈モノ〉の力にたいして、実証的な立場から検討を加える。おお、それっぽくてカッコイイかも。

### 〈モノ〉にこころを込める行動は人類共通

でも目的がカッコイイことと、実際に研究を進めることは別な話である。研究を開始してすぐにぶつかった壁は、研究対象としての仏像の幅広さ・多様さ、および適切な視覚刺激としての仏像画像の不足であった。言葉は現実の多様さを隠蔽することがある。「仏像の表情・眼力」と言ってしまうことで、研究対象を限定したつもりになっていたが、狭さと浅さがまだ足りなかったのだ。さらに、実験に使う視覚刺激は「統制」されていなければならない。仏像を撮影する写真家の方々は、なぜあんなに陰影を好むのか。正面から撮ってくれればいいのに……。というわけで、しばらくは頭を悩ませる日々が続いていた。

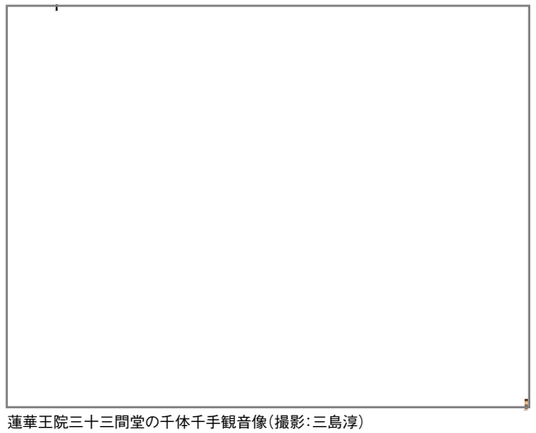
その折、前述の「京都における癒しの伝統とリソース」の一環としてバリ島ウブドに視察に行く機会があった。詳しい話は他の方々に書いていただけると思うが、生活の一部となっている工芸・彫刻に触れることで、〈モノ〉にこころを込めるという行動が人類に共通するものであるという確信を持ち、日本に帰ってきたときには、みんなでなんとかして調べる方法を考えなければと思うようになっていた。

バリ島の〈モノ〉たち（撮影：大石高典）

### 三十三間堂の千体千手観音像撮影

上に述べたように、仏像に限らず彫刻や絵画などを実験心理学での研究対象とする場合、その多様性が問題となる。ある仏像と他の仏像が表情・視線・姿勢など様々な点で大きく異なるだけでなく、撮影の角度・照明なども画像ごとに違う。でも京都には世界に名だたる「蓮華王院三十三間堂の千体千手観音像」がある。なにしろ同じものを作ろうとしてがんばったのだから、表情を持つ〈モノ〉としての仏像の視覚刺激として、これほど適切なものはないだろう。これを我々で撮影すればどうだろう。

……裏で表でいろいろな動きがあり、日本宗教界のネットワークにつながる某K田先主の菅原信海先生のご好意によって、仏像の撮影許可を得ることができた。このチャンスを逃すわけにはいかず、早速プロカメラマンの三島淳さんに撮影を委託し、アジア・アフリカ地域研究研究科の小山敦資さんに撮影サポートをお願いした。平成20年の9月、ちょうど満月だった閉門後の三十三間堂はひっそりとしていたが、撮影は一時も休むことなく続き、千体千手観音の内計48体の正面および斜め下からの角度の高解像度画像を、均一の距離・ライティングで撮影した。これらの画像は学術資料・データベースとして貴重な価値を持つだけでなく、心理実験や評定実験における視覚刺激としても、最も統制されたものと言えるだろう。さて実験だ！　まずは基本的な評定実験をやろう。その内容はまた稿を改めてということで、乞うご期待。



蓮華王院三十三間堂の千体千手観音像（撮影：三島淳）

論考

# 文明と子どもの命／親の〝愛〟――歴史と文学に学ぶ心理学

柏木　惠子 Keiko Kashiwagi
（東京女子大学名誉教授）

## はじめに

「こころの未来」解明をめざすセンター誌に、あえて「過去に学ぶ」ことを書こうとしています。

人の成長発達は社会に否応なく拘束されていることは、発達心理学や文化心理学が明らかにしているところです。しかしそこで扱われている社会、環境なるものはごく最近の、しかも先進国の極めて限定されたものにすぎません。心理学の研究の歴史は浅く、たかだか100年、今日とは大きく異なる社会状況の中で人々がどう生き、何を喜びとし、どのような悲哀を味わっていたかはまったくわからない、お手上げです。歴史や自伝／書簡を含む文学は、心理学の手の及ばない過去の人々の生活や喜怒哀楽を雄弁に示し、現代の人々の生活と心理がいかに最近の社会――文明／文化によくも悪くも拘束されているかを教えてくれます。親子の関係や子育てに関心をもって研究してきた私にとって、歴史／文学に散見される子どもの誕生／命、その親の生活、子どもへの親の愛／育児の様相は、視野の狭さを払拭し、新しい研究課題への刺激に満ちています。

## 親にとっての子ども、その命の意味

**――文明が変え／つくり出すさまざまな命**

最近、出版された15～16世紀ドイツの画家デューラーの『自伝と書簡』の冒頭に、家譜――家族の誕生についての記録があり、デューラーの父は妻バルバラが出産した18人の子どもの誕生の日時、洗礼と命名について逐一記しています。**表1**は家譜の一部――6番目と7番目、8番目の子どもの時のものです。

バルバラは享年63歳、当時としては長生きでしたが、その生涯の3分の1にあたる23年間、子を産み続けていたのです。しかし産んだ18人の子どものうち、成人したのはデューラーを含む男子3人だけでした。この話をある若い母親にしたところ、即座に「子どもを産む機械みたいじゃない！」と呆れ、感嘆こもごもの感想を述べたのでした。しばらく前、当時の厚労省大臣が「女性は産む機械」と発言して世のひんしゅくを買ったのとまったく同じですね。でも、産んだ体験のある女性がいうのと男性、それも為政者である男性がいうのとでは、言葉は同じでも意味も重みもそこに込められた感情も違います。

少し時代は下がりますが、作曲家バッハ夫妻の家でも19年間に13人の子どもが誕生しました。しかし、多くが夭折し、親以上の年齢まで生き長らえたのは4人にすぎません（マルティン・ペッツオルト、2005年）。ほぼ同時代のスペインの画家ゴヤの妻も20回ほど出産しましたが、成人まで生き延びたのはたった1人、他の19人すべてを夭折させています（森、2002年）。

さて、少子化は今や日本の大問題となっています。しかし少子――夫婦が2人か3人の子どもを育て残すということは、すでに人類は体験ずみ、デューラー、バッハ、ゴヤの家庭はいずれも少子といってよいでしょう。今日の少子（化）で大騒ぎすべきは、子どもの数の問題ではなく、子どもというものがどのように誕生するか、つまり子どもの命の出自の決定的変化、そのことです。18人、20人も子が生まれた、けれども2人か1人になってしまったのがデューラー、バッハ、ゴヤの家庭。子どもの誕生も夭折も親の意思や力の及ばないこと、子どもの命は人知を超えたものから親に「授かる」ものだったのです。それが一変しました。今日の少子（化）は、子どもは2人にした、親の意思・決断の結果です。子どもの命は親の意思の下におかれ、親の「つくる」ものとなったのです（中山、1992年、柏木、2001年）。

デューラーの母バルバラ（デューラー画）

表1　デューラーの母の6～8番目の子どもの誕生の記録

| | |
|---|---|
| 6番目の子ども | キリスト降誕後の1474年、聖ドーミッツの日（5月24日）の2時に、妻のバルバラは私のため第六子を産んだ。その子のため金細工師のウルリッヒ・マルクが名付親となって私の息子をアントニーと命名した。 |
| 7番目の子ども | キリスト降誕後の1476年、聖セバスティアンの日（1月20日）の1時に、妻は私のため第七子を産み、アグネス・バイヤー嬢が名付親となって、私の娘にアグネスと命名した。 |
| 8番目の子ども | その後1時間あまりして妻はもう一人の娘を苦痛をもって産み、その子は急場の私洗礼を受けてマルガレータと名付けられた。 |

（デューラー、前川誠郎訳『自伝と書簡』岩波文庫、2009年より）

## 「子どもを産む」ことへの感情

**――“おめでとう！”といえる出来事？**

ところで、このように次々と妊娠し、しかも死産も夭折も日常的、加えて母親自身が命を落とす産死さえ稀ではなかった時代、当時の人々はこのことをどう受け止めていたのでしょうか？

デューラーの父は18人の子どもの誕生を淡々と記録し、妻は「自分（夫）のために」子を産んだと記しています。妻の出産は夫のため、家のためだったのです。当時の社会を支配していた教会は「産めよ殖せよ」を夫婦の信条として奨励していましたし、為政者にとっても税金や兵力のため多産は奨励すべきものでした。そして、〈結婚―セックス―妊娠―出産＝子ども〉という連鎖は自然／当然のこと、そこで「機械」のように矢継ぎ早に妊娠し出産したのです。

しかしお産の当事者――女性たちはこれをどう受け止め感じていたのでしょうか？　妻バルバラ自身はなにも記録を残していません。バッハやゴヤの妻の記録もありません。しかし、多産を体験する女性の周囲にいた女性たちは、相次ぐ妊娠を決して歓迎していなかった、それどころか嫌悪と哀憫の感情を抱いていたようです。19世紀イギリスの女性小説家ジェイン・オースティンの手紙はそのことを率直に伝えています（**表2**）。

いずれも妊娠を「おめでとう！」とはいっていない、それどころか嘆かわしい、何たることとみなしています。教会や夫／男性たちは歓迎していた妊娠・出産を、女性たちは忌避したいと思っていたのです。これは妊娠―出産という命がけの体験をする女性の本音。親しい姉あての手紙だからこの本音が書かれたのです。

フランスの書簡文学者セヴェニェ夫人も、再三の妊娠を知らせる娘への返書に、（わたしは）孫が生まれるなど嬉しくもなく喜んでなぞいない。あなたの命が心配でたまらない。こうならないよう婿殿にいってやりたい、といったことを書き送っています（アリエス、1999年）。

## なぜ少子か？

**――「なった」少子と「した」少子＝人口革命**

さて、日本をはじめ先進国では、死産も産死も稀となり妊娠／出産の

ジェイン・オースティン

表2　ジェイン・オースティン、姉あての手紙の一部

1807年2月7～8日付

（あまりよくないニュースを書いたあとで）

「デイーズ夫人がまたまた子供を産むことも嘆くべきでしょう」

1808年10月1～2日付

「テイルソン夫人は可哀相な人！

なんだってまた妊娠しているのでしょう？」

（ジェイン・オースティン、荒井潤美編訳『ジェイン・オースティンの手紙』岩波書店、2004年より）

危険はほとんど消滅しました。けれども、女性たちは今も子を産むことを手放しで歓迎してはいません。依然として躊躇、迷い、そして忌避、断念も稀ではありません（青木／丸本、1991年、本田、2007年）。

## 〈結婚―セックス―妊娠―出産＝子ども〉の連鎖が切れた！

〈結婚―セックス―妊娠―出産＝子ども〉の連鎖は、種の保存のための本能の営みとしてながらく当然視され実践されてきました。この連鎖が断絶しました。「結婚しても子どもをもたなくてよい」との意見は先進諸国では過半数を超え、結婚は子ども／子孫を残すためとの考えは今や皆無に近い状況です。そしてセックスは結婚とも子どもとも無関係、「合意すればOK」と一緒に食事するのと違わない日常茶飯のこととなりました。どうしてこうなったのでしょうか？

医学の進歩と衛生や栄養などの改善は、乳幼児死亡率を急速に低下させました。日本は乳幼児死亡率1000人中3人と世界最低、このことは子どもの命がほとんど死なない強靭なものになったことを意味します。そして「子は生めば必ず育つ」との確信を親たちに持たせることになりました。そこで、子どもが次々と生まれてくるのを放置せず、事前に子の数や時期を決めるようになりました。ながらくご法度だった避妊と家族計画が公然・当然のものとなりました（太田、1991年、荻野、2008年）。このように乳幼児死亡率の低下を背景に、子どもの誕生、子どもの命は親の意思／決断の下におかれるようになったのです。意思／決断の結果が少子で、少子になったのではなく少子にしたのです。

## 「つくる」理由
### ――「社会／家のため」から「自分のため」

子どもは自然の摂理によって「授かる」ものではなくなって、親の意思／決断の結果、「つくる」もの、親の人工物ともいえるものになりました。「（子どもふたりで）豊かな生活」が戦後の目標、やがて「少なく産んでよく育てる」とのスローガンの下、多子が避けられました。さらに少子の理由として、「自分のため」がクローズアップしています。なぜ子を産むか（／産まないか）を検討しますと、多子を避けるのみならず、子産みそのものさえ躊躇する最近の事情が窺えます（**表3**、柏木／永久、1999年）。（余談ですが「なぜ子を産むか」がリサーチクエスチョンとして成り立つこと自体、今日ならではですね。）

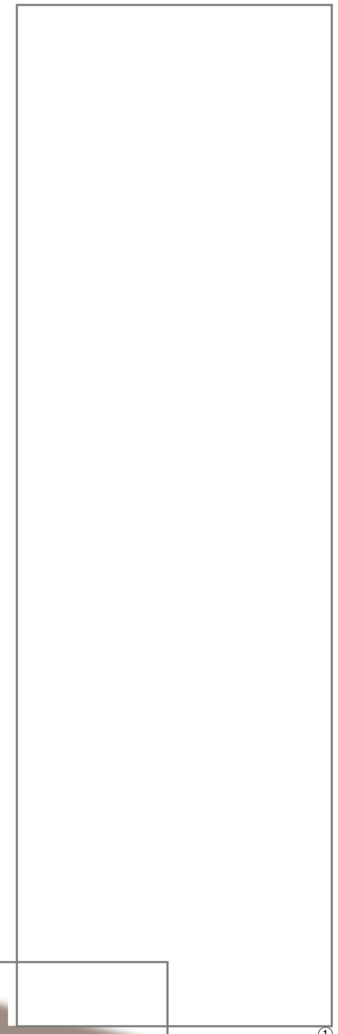
年配の世代では、「（結婚したら）子どもをもつのは当たり前」「次の世代をつくるのは（結婚した夫婦の）責任」、また「家名やお墓を継ぐ」など、社会や家のためという社会的責任感は強いものでした（今もそういう政府は安泰ですね）。それが若い世代では一変します。社会や家のためという責任感は稀薄で、「育ててみたい」「老後に安心」「しごとの区切りがついた」「2人の生活は十分楽しんだので生活を変える」など、自分自身にとって子どもや出産／育児が意味あると認める、自分の生活に障害にならないことが子産みの理由です。「（うちは）2人生んだ、責任は果たした」と発言する前首相のように、社会的責任で子どもをもつ人は今やほとんど例外的です。「妊娠出産を体験したい」という、オースティン時代の女性たちなら驚くような理由も少なくありません。女性だけにできること、ならば一度は、と思ってでしょうか。妊娠出産が安全になり避妊も当然になった状況の中で生まれた新しい欲望といえるでしょう。漫画本『私たちは繁殖している』（**図1**、内田春菊、1996年）がベストセラーになったのは、出産体験へのつきない興味と若い世代での産む理由を反映するものでしょう。

さらに、科学／医学の進歩はいわば「造り出される」子どもの命も実現させました。セックスなしの妊娠、配偶者以外の精子や卵子による妊娠、配偶者以外の子宮による妊娠／出産など、かつてない形の子どもの誕生です。しかしこの生殖医療は単純に不妊カップルへの福音とはいえません。経済的・心理的・身体的負担の大きい治療を受けるか否かの重い選択、いったん始めると容易に諦められずカップル間に生ずる葛藤（小泉ほか、2009年）、さらに被選択者であり弱者である子ども側の出自を知る権利など、新たな課題や苦悩をもたらすことになりました。また、親とは誰か、生殖医療を適用する条件などの法整備と人々の価値観に関わる多くの課題を提起しています。

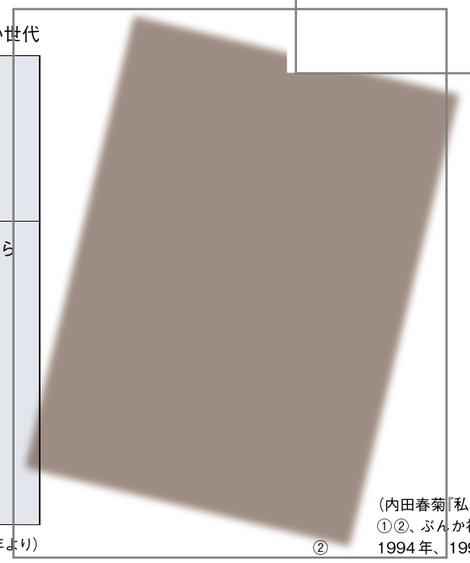
## 育児不安はなぜ？
### ――種の保存と個体の生存成長への資源投資をめぐる葛藤

こうして生まれてくる子の育児はすんなりされているでしょうか？育児不安という日本特有ともいえる現象が母親の間に広くみられます。その育児不安の内実は、子どもや育

図1　内田春菊『私たちは繁殖している』



①



②

（内田春菊『私たちは繁殖している』①②、ぶんか社、1994年、1996年より）

表3　子どもを産むと決断した理由――年配世代と若い世代

| | |
|---|---|
| 60歳世代で顕著な「産む理由」 | 結婚したら産むのが普通<br>生み育ててこそ一人前<br>次の世代をつくる<br>生き甲斐になる<br>姓やお墓を継ぐため必要 |
| 30歳世代で顕著な「産む理由」 | 2人だけの生活は十分楽しんだから<br>妊娠・出産を経験したいから<br>夫婦関係が安定したので<br>年をとったときいないと淋しい<br>生活に変化が生まれる<br>自分の生活に区切りがついたから<br>経済的なゆとりができたから<br>仕事が軌道にのったので<br>手伝ってくれる人がいたので<br>よい保育園があったから |

（柏木・永久、1999年より）

児についての不安よりも、育児だけしている自分についての不安／焦燥／不満の方がずっと強いのです（数井ほか、1996年）。育児と母親自身の生活／活動とが対立葛藤しているのです。このことは、「母親なのに」「ジコチューだ」「大事な育児をないがしろにしている」という非難で済むことでしょうか？

哺乳類であるヒトの繁殖―種の保存は、〈妊娠＝胎児の女性体内での成長―出産―さらに養育〉という一連の過程ですが、この営みは、時間、栄養、体力、気力など母親がもつ資源の投資にほかなりません。ところがこの資源は有限で、しかも同じ資源が親自身の生存／成長にも必要です。そこで、有限資源を繁殖（妊娠／出産／育児）と自己成長の２つにどう配分投資するかが問題になります。双方にそこそこ配分されていれば問題は生じない。ところが、片方だけに資源投資が偏り他方への配分が欠けた状況では、資源の持ち主――母親に不満や不安が生じます。日本の母親に育児不安が顕著なのはこれが一因です。日本では子どもの誕生と同時に、しごとを辞め専業母親となる女性が今も７割います。すると、その母親は自分の時間も活動もほとんど持てなくなる、もう一人の親は稼ぎ手で育児不在になりますから、子育てにすっかり拘束されてしまうからです。いくら子どもはかわいい、育児は大事と思いつつも、自分自身の関心や能力を発揮したり育てる機会から疎外されてしまっている、そのための不安、焦燥、不満なのです。先の「産む理由」にも、子どもをもつことが自分にマイナスにならないか、メリットがあるかを検討している様相がみられましたが、ここには予想される育児と自分への資源配分に慎重な態度をみることができます。

## “いろいろな”「つくる」少子への親の愛情と教育

今、子どもの出自に関して“いろいろな”子どもがいます。かつては、やさしい子、活発な子、頭のいい子というふうに個性においていろいろな子どもがいましたが、今日はその出自において多様な子どもがいる史上初の時代です。つくった子、つくり出された子、できちゃった子というふうに……。子が親の意思に無関係に「授かる」多子の時代と今日とでは、親にとっての子どもの位置・意味が決定的に違います。このことが親の子どもへの愛情、関心、教育的営為を変質させつつあります。

親の決断によって「つくった」子どもは、（社会の子どもでなく）親に属するものと捉えられ、親のもちもの的な存在、まさに「我が子」となりました。しかも子は親の心身経済の多大な投資によって「つくった」「造り出された」のですから、その子どもに対して親は強い思い入れを持ちやすいのです。つくらない選択もある中で、自分の意志と決断によってつくったからにはといわんばかりの物心両面にわたる関与、子の発達、とりわけ知的発達への高い期待、その実現のための数々の教育的営為。これらは「つくる」少子の時代ならではのことです。

先進諸国では、子どもの知的発達に強い関心と期待があり、それを促す教育を子に念入りに施すのは当然とされています。しかしそれは、子どもの命がいつ果てるかもしれぬ時代、そして親の寿命も見通しの立たない時代にはあり得ないことでした。たくさんの子が次々と授かる、しかし子の命は儚かった時代、また今日に比べて貧しかった時代、親たちが子どもにしてやれたことは限りがありました。子が無事に育つように、健康でさえあればと願い、他方、親がいついなくなっても１人で生きられるよう独り立ちを促すことが養育のゴールでした。そしてそのために乏しい家計のなかで「できるだけのことをしてやる」、これがせいぜいだったでしょう。

## 豊かさのなかの貧困な育ちの環境

**――「よかれ」が支配／暴力に**

発展途上国の親子をつぶさに研究したアメリカの文化人類学者LeVine.Rは、子への親の愛情と養育目標は子どもの生存率によって異なると指摘しています（1994年）。今日の親の愛情と養育の営みは、最低となった乳幼児死亡率の下、「生めば必ず育つ」という確信と、子を「つくる」少子時代ならではのものです。長寿命化も子どもの発達環境を変化させました。今、子どもがかなり大きくなるまで両親双方の祖父母４人が健在な家庭は珍しくありません。親に加えて祖父母からも少子に注ぎ込まれる熱い期待と物心の投資、これは前代未聞のこと。この状況は子にとってはたして幸せといいきれるでしょうか？

今日、親の「よかれ」と「できるだけのことをしてやる愛情」は、子の発達権を侵害しつつあります。子の自発性や個性をないがしろにした親の「よかれ」の支配、「できるだけのこと」をする過剰な介入が、子どもの不適応症状や親への叛乱を引き起こしている例は少なくありません。多子で親も富裕ではなかった時にはうまく機能していた「できるだけのことをしてやる親の愛情」は弊害化し、「よかれ」との親の「愛情」が「やさしい暴力」「愛という名の支配」となっている事例は少なくありません（柏木／平木、2009年）。成人子が離家せず、親から住居と家事万端の世話を受けているパラサイト現象も、「できるだけのことをしてやる」親の「愛情」が子の成熟と自立を阻害していることは確かでしょう（宮本、2004年）。

教育熱心というものの、親自身と子の直接の交流は乏しく、教育は塾やおけいこなど外注。子どもの成長発達にとって何が重要か、当の子どもの個性と志は何かを問うより先に、成長し続ける教育産業の受益者に甘んじ、子どもがもつ育つ力と心は疎外されています。豊かな社会の中で、物心両面にわたって子に降り注がれる関与／介入は、豊かさの中の貧困といえるのではないでしょうか。

このような風潮は、子の養育責任が母親だけに集中してしまっていることも一因です。近年、家族の機能は成員の心身の安定と子の社会化つまり養育に収斂しましたが、この「教育家族」で養育役割が極端に女性に集中しているのが日本です。一任された子の養育に「失敗は許されない」とばかり過剰に関わる、また自分自身の活動から疎外されていることから子の「成功」を即自分の成功と同一視する代理達成などに陥りやすいからです（本田、2004年）。

## おわりに

最近、生命学、死生学という新しい学問領域が登場し活発な論議を提供しています。そこでのテーマは主として尊厳死や死の判定基準などおとなの生と死の問題、子どもについては生殖医療に関するものに留まっています。本稿で取り上げた子どもと（母）親の命の問題は、命があまりにも強靭となり長命ともなったことで、一顧だにされないきらいがあります。けれども、子の命は儚く親の命も定かでなかった時代の人々の生き方や親と子の関わりをみますと、今日見失ってしまったものの大きさに改めて気づかされます。

最近再読したトルストイの『戦争と平和』の１シーン。戦地で九死に一生を得て奇跡的に帰還したアンドレイ、彼がまず遭遇したのは子の誕生とその母つまりアンドレイの妻の産死、これらはまさに本稿のテーマそのものでした。その後のアンドレイたちの生涯は、常に死の影を意識する中で、今ある命を大事に味わいつくす緊張の中にもいきいきとしたものでした。子はよもや死なない、平均寿命ぐらいは生きるだろうとの楽観の上で、時間も心身エネルギーも無限であるかのようにのどかに浪費してはいないだろうか？　そして加速度的に進歩する文明の便利さを「恩恵」と享受することに走り、人類の未来を展望して今どう生きるか、何が幸せかについての省察を怠っていないだろうか？　文明の進歩に英知が追いついていない、そのギャップが埋められずどんどん大きくなってしまわないか？

このような「こころの未来」に強い関心・寒心を抱いています。先に「豊かさの中の貧困」と記した昨今の親の子への養育的営為もその一端。科学技術という文明の進歩が子どもの命を変質させ、親の愛情と教育的関与も変化させた、その科学技術に持（たの）む姿勢、人知を超えたものへの畏敬を忘れがちな傾向から、未来の子どもが育つ条件と親の役割の再考（柏木、2008年）を願わずにはいられないのです。

### 参考文献


デューラー、前川誠郎訳『自伝と書簡』岩波文庫、2009年。
マルティン・ペッツォルト、鈴木雅明監修、小岩・朝山訳『バッハの街――音楽と人間を追い求める長い旅へのガイド』東京書籍、2005年。
森洋子『子供とカップルの美術史――中世から18世紀へ』NHKブックス、2002年。
中山まき子「妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識――子どもを〈授かる〉〈つくる〉意識を中心に」『発達心理学研究』2、1992年。
柏木惠子『子どもという価値』中公新書、2001年。
ジェイン・オースティン、荒井潤美編訳『ジェイン・オースティンの手紙』岩波文庫、2004年。
アリエス、P、成瀬駒男・伊藤晃訳『歴史家の歩み』法政大学出版局、1999年、357～358頁（セヴェニェ夫人の書簡引用は井上究一郎訳『セヴィニェ夫人手紙抄』岩波文庫）。
青木やよひ・丸本百合子『私らしさで産む、産まない』農文協、1991年。
本田和子『子どもが忌避される時代――なぜ子どもは生まれにくくなったのか』新曜社、2007年。
太田素子「家族計画の思想」『シリーズ変貌する家族　1　家族の社会史』岩波書店、1991年。
荻野美穂『「家族計画への道」――近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店、2008年。
柏木惠子・永久ひさ子「女性における子どもの価値――今、なぜ子を産むのか」『教育心理学研究』47、1999年、170～179頁。
内田春菊『私たちは繁殖している』①～⑨、ぶんか社、1994～2009年。
小泉智恵ほか「生殖医療と家族の発達；非典型的な家族をいきる」日本発達心理学会第20回大会、シンポジウム、2009年。
数井みゆき・無藤隆・園田菜摘「子どもの発達と母子関係・夫婦関係；幼児を持つ家族について」『発達心理学研究』7、1996年、31～40頁。
LeVine R.A.et al.1994 Childcare and culture; Lessons from Africa. New York Cambridge University Press.
柏木惠子・平木典子『家族の心はいま――研究と臨床の対話から』東京大学出版会、2009年。
宮本みち子『ポスト青年期と親子戦略――大人になる意味と形の変容』勁草書房、2004年。
本田由紀「『非教育ママ』たちの所在」本田編『女性の就業と親子関係――母親たちの階層戦略』勁草書房、2004年、167～184頁。
トルストイ、藤沼貴訳『戦争と平和』全6巻、岩波文庫、2006年。
柏木惠子『子どもが育つ条件――家族心

# 詩と絵とこころ

松生　歩 Ayumu Matsuike
（画家、京都造形芸術大学芸術学部教授）

## 詩や絵が生まれるとき

私は絵を描いている。

一応日本画というジャンルにいる者として位置づけられているのだが、ふだん自分が日本画家だということを意識することはほとんどない。使っている画材が岩絵具なのは、確かに日本画の証のようにも思えるが、洋画家が岩絵具を使ったって何の問題も生じないのだから、画材だけがジャンル分けの決定打というのも不自然である。

他の人から見てどう映るのかは自分ではよくわからないが、「日本画」ということではなく、「日本の昔からの絵画表現」の中で、私が共感し馴染んでいるものに、絵巻や南画のような、物語や詩と一体になった表現があるのは確かである。

私はたいていの場合、自作の詩や物語と連動した絵画作品を発表してきた。実際に絵と並べて文章も展示することが多いのだが、絵だけを展示している場合でも、自分の中では必ず作品の中に詩があった。そもそも作品のイメージが浮かんでくる時、映画のように言葉と映像が同時に出てくるので、切り離しようがなかったからである。

私は自分で言うのも変かもしれないが、いたって生真面目で堅物で苦労性・貧乏性で、依怙地に自分を苛めてやたら卑屈に頑張る性格である。しかもその頑張りがたいてい空振りの連続で、何の成果もなくいつも汲々としている、かなり無能な人間である。

しかし、どういうわけか絵や詩の発想だけは、机に向かって頑張ったことがない。というより、頑張ったら絶対浮かばない。机に向かっては何も見えたことがない。

見えるのはまったく別の状態の時だ。けれどだからと言って、絵や詩を書くのが楽なわけでも上手いわけでもなく、いつもいつも苦労している。100 枚の絵を描けば 100 枚ともどん底の駄作で、自分はこの世にいる資格のない人間だとさえ思い詰める。けれど、200 枚目か 300 枚目に突然、「勝手に出来上がる」という事態が訪れたりする。

その時だけが、本当に「絵が生まれた」ということなのであろう。「自分が描いた」のは本当の絵ではないのだ。けれども、描いて描いて描いて、気が遠くなるほど苦しむプロセスの中でしか、「生まれる」という事件は起きてくれない。

では、詩や絵が生まれるとは、一体どんなことなのか、自己を振り返りつつ、考えてみたい。

## 頭の中の言葉

人間の頭の中には絶えず言葉が氾濫している。子供はいったいいつごろから、自分のこころに浮かんだ思いを言葉で反芻し始めるのだろう。気がついたら、ものを言葉で考えるようになっている。おかげで気を許すと、頭の中はしょっちゅう雑音だらけになる。嫌なことがあったとき、苦痛から逃れたいとき、逆に楽しい予感がするときも、私たちは頭の中で休みなくせりふをつぶやき続ける。感情が高ぶってくると、自分でも止めようのないくらいすさまじい勢いで言葉が押し寄せては流れ去ってゆく。自分の考え出したせりふに追い立てられるように、次々と思考が生まれて変遷し、いつの間にか自分の言葉で自分の感情をさらにあおり続けていることに気づいたりする。

しかし、この場合の言葉はいうなれば「ゴミ」だ。そこにはまったく真理はない。

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』から「天気輪の丘」松生歩、2006 年

## 言葉の力

言葉というものはおそろしい。口に出してしまえば、周囲の者の感情や、自分の置かれた状況を確実に変化させる。また、口に出さなくとも、自分のこころの中でつぶやいた言葉は確実に自分の脳に働きかけ、自分の行動と運命を変化させてしまう。なぜ、言葉にはそんな力があるのだろう。

もちろん、数え切れないほどの理由と由来とデータがあるはずだが、今、日常自分が感じている言葉の力を 3 つだけ挙げるとすれば、1 つは「音としての力」、もう 1 つは「感情と結びついたときの力」、さらに「魂から降りてくる力」がある。

まず、「音としての力」であるが、私は言語学にも宗教にもまったく知識のない身であるが、言葉に「音」としての力があるということは感じている。特に母音には何か身体に及ぼす規則的な力があるように思う。音とは、振動とか、周波数と言い換えてもいいかもしれない。人間の言語に限らずとも、動物の鳴き声でも、木の葉のざわめきでも、波の音でも、人間には聞き取れないイルカやコウモリの発する音でも、何がしかの影響を人に与える。また、人間の奏でる音楽や、優しい語りかけが、動植物の育ち方に影響を及ぼしたりもする。どんな物も固有の波長を持っていて、お互いに影響を与え合っているのが世界の姿なのかもしれない。その中で、言葉は「音」としてだけでなく、「意味」をも持つものであるから、影響力はさらに大きいといえるだろう。

次に「感情と結びついたときの力」は、さらにもっと強力である。喜怒哀楽のそれぞれの場面で、人はさまざまな言葉を発するが、特に怒りの感情が言葉となって発せられたとき、その言葉が相手を傷つける力には恐ろしいものがある。プラスの感情、愛のある感情から出てくる言葉には、相手を励ましたり高揚させたり、暖かな波動で包み込む力があるが、マイナスの感情から発せられる言葉は、相手を暗い闇に引きずりこんでしまう強力なパワーがある。感情から発する言葉には、明らかに目に見える形で相手を変えてしまう力があるのだ。それゆえ、人は自分の発する言葉に注意を払い、責任を持つべきであろう。

ところで、本稿で扱いたかったのは、最後の「魂から降りてくる力」としての言葉である。

## 降りてくるということ

言葉はこころの中に生まれる。正確には脳の中に生まれると言った方がいいのかもしれない。前述の「ゴミ」と称したこころの中の雑音は、表層意識の中を漂っている無常な存在である。感情に由来して派生してくる言葉の多くは、この類であると思う。

一方、「降りてくる」言葉は、自分の頭で能動的に作り出したものではない。それはおそらく深い潜在意識の中から、ある条件の下に浮かび上がってくるもののような気がするのである。

人はふだん衣服を身にまとうように、こころにも感情という衣をまとって生活している。親切で優しい人でも、一皮剥けばこころの中にはどろどろしたものが蠢いているもの

だ。その方が人間らしいとも言えるし、だからこそ詩や絵も、ただ綺麗なだけのものは嘘臭い。

暗く、グロテスクなものの方がリアリティが感じられ、それこそ本物の芸術だと時に評判になったりもする。

しかし、そんなに単純なものだろうか？　確かに、一皮剥けば人間は汚い。隠していた感情があらわになるから。しかし、潜在意識の底に向かって、すべての感情を剥いて剥いて剥いて、どこまでも剥き続けてゆけばどうなるだろう。そこに現れるのは透明な光のような存在ではないだろうか。

徹底的に自我の衣を脱ぎ捨てたら、最後には自他の区別も必要がなくなる。区別は自分が安心を手に入れようとして、逆に恐怖に駆られて作り出していたものに過ぎないとわかるから。区別が自ずから消滅したとき、そこで初めて人は限りない自由を手に入れる。

その境地にいるとき、すべての存在物の波動が伝わってくる。見えるもの、見えないもののすべてに自分が見守られている実感に感謝があふれ、音にならない音を聞き、見えないものを見ている感覚がある。自分はただただ透明で、木とも水とも風とも、遠い宇宙とも結び合っている。

その時、言葉が降りてくる。

言葉と共にビジョンがあらわれる。

私には感知できないけれど、音に敏感な人なら、そのとき映像ではなく音楽が生まれてくるはずだ。また別の人は踊りたくなるかもしれない。

## 芸術の始まり

ビッグバンの話を聞くたび、それならビッグバンの前の宇宙はどうなっていたのかと不思議に思うのは誰しもに共通した思いではないだろうか。私たちは今、生命の進化の枝分かれの先端として生きているけれど、枝から幹へ、幹から根へ、根から地球へ、地球から銀河へ、銀河から宇宙へ、宇宙からその先へと思いを馳せるたびに、枝分かれしていた意識が大元に向かって太く一元化してゆく。その源には何があるのだろう。私たちの正体とは何か。

頭で考えてもわからないけれど、私たちのDNAと潜在意識には、それが刷り込まれているはずだ。そして、生命が成長を欲して止まない理由も、結局は進化の螺旋を上昇することで自らの出自を思い出し、帰還したいという願望からのような気がするのである。

その願望は、きっと大昔から、祈りや表現活動と結びついてきただろう。「降りてくる」何かを、人々はさまざまな方法で表現しただろうし、それを皆で共有しただろう。その中で自己と他者との境界がなくなる体験をも共有できたであろう。そんなことが芸術・芸能の始まりだったような気がする。

## 詩と絵とこころ

真理に少しでも近づく、あるいは近づきたいと願う純粋な意識が表れた詩や絵が、数万行に1行、数千枚に1枚しか創り出せなかったとしても、こころに「降りてくる」ものを待ち続けて創作に打ち込むことは幸福である。大変な苦労に満ちた幸福である。そしてまた、そのような様々な芸術に触れ、こころで味わうこともまた、大きな幸福である。ただしこの場合の「こころ」には汚れた感情を廃した、静かな水面のような状態がふさわしい。

仮に、私たちの生命が、例えば永遠とか宇宙の本体と思われるくらいの、ある大きな「ひとつのもの」の細胞のような位置づけだと想像してみれば、ある細胞はものを作り、ある細胞は作られたものを味わうことで追体験し、両者は常に感動の波長を共有する。そしてその波長は本体の「ひとつのもの」と同調して常に美しい響きを奏でる。そしてまた、「ひとつのもの」からも常に響きは細胞に届けられる……。

このような想像は、無意味なことであろうか。「絵は自分のために描く」のが正論のように言われたものだが、私にはずっとしっくり来なかった。「他者のために描く」というのもおこがましいことだ。「芸術のため」というのも格好をつけすぎているように感じる。絵は、私たち存在物のすべての根底に流れている何かに向かって、その融合のために描いているように、私には思える。

そしてそれは、音楽や文学、舞踏を始め、すべての芸術に共通していることのように感じるのである。

「気配」松生歩、2005年

「午後の慈光」松生歩、1983年

「すばるへ　そしていのちのために
わたしたちがえがいてきたもの
わたしたちがいのってきたこと」
松生歩、2009年

論考

# 2＋1 ――こころを支える3つの時間軸

友永雅己 Masaki Tomonaga
（京都大学霊長類研究所准教授）

私は、愛知県犬山市の京都大学霊長類研究所でチンパンジーの認知能力とその発達について研究している。この地にやってきたのはソウルオリンピックの年だった。もう20年以上が経過したことになる*。

## 比較認知科学 ―こころを支える「進化」という時間軸―

私たちのこころとは一体どのようなものなのだろうか。これは私の追い求める究極の問いだ。チンパンジーを研究しているのに、と言うなかれ。私は人間のこころというものを「時間軸」の中で捉えたいと考えている。まずその1番目は「進化」という時間軸だ。それがチンパンジーという生きものを相手にほぼ四半世紀も研究してきた理由だ。人間のこころはどのように進化してきたのだろうか。最近はこころの研究に「進化」という時間軸が盛り込まれることにみんなさほど違和感を抱かなくなってきたようだ。しかし、私たちのこころがからだと同様に進化の産物である、という当たり前の前提に立って研究を進めるというスタンスはこの20年くらいの間にようやく認知されるようになってきたものである。私たちはこのような立場を「比較認知科学」と呼んでいる。最近はやりの進化心理学とは密接な共闘（？）関係にはあるが、後者は主としてヒトのこころに潜む「進化」の名残を探ろうとしているのに対し、われわれ比較認知科学者はヒトを含む現生種間の「比較」という手法を駆使して、ヒトのこころの進化の過程を再構築し、さらにその理由にも答えようともくろんでいる。また、比較認知科学は必然的に、認知能力の「収斂」のみならず、その多様な適応の様にも注意を向ける。これら2つの姿勢を車の両輪として研究が進展してきた。

チンパンジーとの研究を通して、彼らのこころのありようの一端が少しは見えてきたように思う。こころを理解するためには、まずその入り口を知らなくてはだめだ。彼らが見ている世界、聞いている世界、触れている世界、というのはいったいどのようなものなのか。私の研究もこういった比較「知覚」研究からスタートした。私たちのこころもチンパンジーのこころも共通祖先から進化してきたということを前提にすれば、両者の知覚世界も大枠は差がないという研究結果は驚くべきものではない。形がどう見えているか、色がどう見えているかなどについては本当にヒトとチンパンジーでは差が見られない。音の聞こえ方については少し違いがあるようだ。私たちが言葉を話すときに使っている周波数帯での聴力がヒトに比べてよくないというきわめて示唆に富む結果が小嶋祥三らによって得られている。

ものの見方について、彼らと私たちで大きく異なる可能性があるのは、見えている世界をいかにして「切り分け」、そしてそれらをどのように「まとめあげる」かという点かもしれない。私たちは木よりもまず森を見るのに対し、チンパンジーはまず木を見てしまうのかもしれない。専門的な言葉でいえば、局所的な特徴に基づく処理か、それらの特徴の全体的な布置に基づく処理か、ということになる。ヒトとチンパンジーでは得られた情報の統合の程度が異なるのかもしれない。このような局所処理と全体処理の優位性の程度の種差が視覚認知の諸相において見いだされている。同様のことは聴覚認知の世界にも見られるのかもしれない。

## どのように比較するか

しかし、注意しなくてはいけないのはこのような種差が見つかったときの「評価」だ。この違いはヒトとそれ以外の類人（hominoid）を分かつ重要な違いであるかもしれない。しかし、実は他の類人はみなヒト型なのにチンパンジーだけが分岐後の特殊な環境への適応の結果として全体処理を失った可能性もある。もしかすると、実はこの差はヒトとそれ以外の霊長類すべてを分かつものかもしれない。このような事例として有名なのは道具使用行動だろう。数年前までは野生下で道具使用を示す霊長類は（ヒトを含めて）、チンパンジーとオランウータンのみだった。他の類人、ゴリラやボノボでは道具使用が報告されていなかった。このようなモザイク状の現象を説明するためには系統発生的制約だけでは不十分だ。それぞれの種が適応してきた進化的環境という要因も考慮しなくてはならない。この話をさらに複雑にしているのは最近の研究成果だ。野生のゴリラでの道具使用が報告され、また、南米のフサオマキザルのナッツ割りがセンセーショナルに「発見」されてしまった。こころの進化を考える際の「系統発生的制約」と「環境適応」の重要性は増すばかりだ。要は、ヒトのこころの進化の過程の中で変化していく能力の最もありうるべきストーリーを描くためには、ヒトとチンパンジーの比較だけでは不十分であるということだ。そういう意味では、チンパンジーでのこころの研究は「問い」を生み出す研究でもある。

## 「比較」発達 ―発達も進化する―

ヒトとチンパンジーは約600万年前に共通祖先から分岐したと考えられている。ゴリラやオランウータンといった他の類人たちとはさらにその数百万年前に分岐し、ニホンザルとの共通祖先との分岐年代になると約3000万年以上も前にさかのぼる。ちなみに霊長類という系統群が生まれたのは6500万年前くらいだと考えられている。この悠久の時間軸の対極にあるのは個体が生まれて死ぬまでの時間、つまり「生涯発達」という時間軸だ。

「ヒトとチンパンジーの比較認知研究をしています」と自己紹介すると、「チンパンジーの知能ってヒトの何歳くらいなんですか?」とよく聞かれる。この問いは2つの面から不適切である。ひとつは、こころを構成する諸能力が均一に発達していくという誤った考え。もうひとつは、チンパンジーも発達する存在であるというきわめて当たり前の事実の見落としである。実は、この批判はそのままかつてのチンパンジー研究にも当てはまるものであった。つまり、かつてのチンパンジー研究には「発達」という観点が健全には組み込まれていなかったのだ。

## 「チンパンジー認知発達研究プロジェクト」

私の所属する京都大学霊長類研究所では、2000年からチンパンジーの認知発達研究プロジェクトを始めた。このプロジェクトについてはこの数年間あちこちで話したり書いたりしてきたので、詳細は省くが、要するにこれまでの点と点の比較（成体のヒトとチンパンジーの比較）、線と点の比較（各種発達段階にあるヒトと静的な存在としての「チンパンジー」の比較）を、線と線の比較（ヒトとチンパンジーの発達過程を比較する）から、さらには面と面の比較（さまざまな認知能力のモザイク的な発達、あるいはモジュール的な発達の種間比較）を視野に入れて研究しようというのが10年前の比較認知発達研究プロジェクトだったのだ。

このとき私たちは、従来のチンパンジーの発達研究とはまったく異なるアプローチをとった。それは「交差養育法」の放棄、つまりヒトが育てたチンパンジーのこころの成長ではなく、母親によって育てられ、その母親は同年代の他個体と世代を構成し、それが幾重にもかさなって築かれた「社会」の中で暮らす子どもたちのこころの成長を縦断的に追い続けたのだ。

たとえば、その成果として、林美里らは先の道具使用の獲得につながる対象操作能力の発達過程を明らかにした。その中で、ヒトに比べてチンパンジーでは棒状のものを穴に差し込むという対象操作が比較的早く出

表情の弁別に挑戦するチンパンジー（撮影:京都大学霊長類研究所）

Masaki Tomonaga

ヒト実験者の指差しに反応する2歳のチンパンジー・アユム
（撮影:毎日新聞社）

現することがわかった。この行動はシロアリ釣りやさまざまな道具使用行動の核になる「プロービング(probing、棒状のものを用いた探索行動)」と呼ばれるものであり、その特異的な発達過程は彼らの道具使用文化を考える上でも興味深い。

また、社会的認知の側面では、明和政子・岡本早苗らとチンパンジーにおける視線の理解と共同注意の発達について調べた。その結果、「わたしとあなた」で成立する2者関係までは種差と呼べるほどのものは見つからなかったのだが、ヒトでは1歳前後に生じる共同注意（他者の見ているものに自らの視線も向けることによって注意を共有すること）の劇的な発達がチンパンジーではほとんど認められないことが明らかとなったのだ。この意味するところは大きい。共同注意を基盤として形成される「場」、つまり「わたしとあなたとモノ」によって構築される豊かな社会環境は、ヒトにとっては「心の理論」が醸成される場であり、ことばが獲得されていく場でもあるからだ。そのはじめの一歩がチンパンジーには存在しない（かもしれない）。発達の時間軸がつむぎだす「比較発達」研究には実はまだ未開の大地が残されているのだ。

## 第3の時間 ―社会・文化・歴史という「時間」―

「比較認知科学研究に発達の時間軸を。これが本小論のメインメッセージです。おしまい。」と思っていたのだが、実はもう1つ、進化と発達の中間にある時間軸の存在にはうすうす感づいていた。それは、「文化」という形で立ち現れる社会・歴史的時間軸だ。ヒトのこころの研究では単純な文化間比較の時代は終わり、「文化心理学」の時代が到来している。文化とこころの関係でよく聞くスローガンは「人間は文化をつくり、文化は人間を規定する」というこころと文化の双方向的関係だろう。このような社会・歴史的時間軸を導入することによってヒトのこころの生物的普遍性と文化的多様性があらわになる。

さる2009年5月に彦根で開かれた「日本赤ちゃん学会」でのトゥールーズ第二大学の則松宏子さんの講演は私にとってはいまさらながらに目からうろこが落ちるような発表だった。食事場面における母子間の相互交渉の日仏文化比較が主たる内容だったのだが、日本の母親は積極的に赤ちゃんの発達を支援する（ヴィゴツキーが泣いて喜びそうな「足場作り」のオンパレード）のに対し、フランスでは母親が絶対的な「制空権」を行使し、赤ちゃんの行動をすみずみまでコントロールしていた。このような行動の背後にある発達観の圧倒的な違い！そしてその結果として、成長していく子どもたちのこころのありようも明らかに異なるはずだ。そして彼らが次代の文化を築いていく。チンパンジーはどうだろうか。

## チンパンジーの文化心理学

チンパンジーの研究においても「文化」の問題がこの10年の間にきわめて重要な問題としてクローズアップされてきた。特に道具使用のレパートリーの集団差などに代表される「物質文化」である。最近の研究ではチンパンジーが道具使用を行う場所の「発掘調査」が行われており、あるサイトでは、4300年前のヤシの実割りの石が見つかっている。このような長いスパンで受け継がれている道具使用行動はチンパンジーが生み出したものであるが、その「文化」がヒトと同様にチンパンジーのこころのありようを規定するということがあるのだろうか。ヤシの実割りをする文化とそうでない文化の間の生態学的な比較というのはこれまでにもあったかもしれない。しかし、その文化が彼らの認識にいかなる影響を及ぼしているのか。そしてその文化で育つチンパンジーのこどもたちのこころの発達にどのような影響を及ぼしているのだろうか。そういう観点からチンパンジーのこころを追った研究というのはたぶん、ない。「比較文化（Cross-Cultural）」心理学ならぬ「比較」文化心理学だ。マクロ（進化）とミクロ（発達）で織り込まれたこころの世界をその両者の中間の時間軸、いわばメゾスコピックなタイムスケールで染めあげるとそこにはどのような模様が見えてくるのだろうか？

チンパンジーのこころの研究を通して見えてくるもの、それはこころを支える3つの時間軸だ。これらが縦横に絡み合って私たちの（そしてチンパンジーたちの）こころが生み出されるのだろう。

＊このころいちばんお世話になった伏見貴夫さん（北里大学）がこの4月に亡くなられた。いまだに信じられない気持ちでいっぱいだが、本小論を彼に捧げご冥福を祈りたい。

西アフリカ、ギニア共和国ボッソウの野生チンパンジーによるヤシの実割り。ここは、「進化」、「発達」、「文化」のクロスロードだ。
（写真提供：野上悦子〈チンパンジーサンクチュアリ宇土〉）

Masaki Tomonaga

座談会

# 変化するこころ、変化しないこころ

木村　敏 Bin Kimura
（京都大学名誉教授、精神医学）

河合俊雄 Toshio Kawai
（こころの未来研究センター教授）

鎌田東二 Toji Kamata
（こころの未来研究センター教授）

畑中千紘 Chihiro Hatanaka
（こころの未来研究センター特定研究員）

**人間存在は「あいだ」こそプライマリーと考える精神医学者・木村敏氏をお招きし、日本語の多義性、日本人の罪悪感の変化、「本末転倒文化」などについて語り合う。**

木村敏

プロフィール
1931年生まれ。京都大学医学部卒業。名古屋市立大学医学部教授、京都大学医学部教授等を歴任。現在、京都大学名誉教授、河合文化教育研究所主任研究員。精神病理学専攻。禅の思想や西田哲学を精神医学に取り入れ、独自の人間学を提起している。著書に『時間と自己』（中公新書）、『人と人との間』（弘文堂）、『偶然性の精神病理』（岩波書店）、『木村敏著作集』全8巻（弘文堂）他、訳書にビンスワンガー『精神分裂病』I・II（共訳、みすず書房）、同『現象学的人間学』（同）他。シーボルト賞、エグネール賞、和辻哲郎文化賞受賞。

河合俊雄

鎌田東二

畑中千紘

## 「あいだ」こそプライマリー

**河合**　「こころの未来研究センター」は、英語で“Kokoro Research Center”と言います。尾池和夫前総長の肝入りで「こころ」という日本語を大切にしているのです。日本語の「こころ」は英語の“mind”なのか“psyche”“spirit”なのか、その意味するところは広い。木村先生はドイツ精神医学から入られましたが、「あいだ」をはじめとして、とても日本語を大切にされていますね。

**木村**　「あいだ」というのは翻訳不可能ですね。たとえば英語の“between”でもドイツ語の“zwischen”でも、まず２つのものがあって、その中間を指す。二次的なものになっています。私は「あいだ」こそがプライマリーであって、そこからその両側が出てくると考えています。別に２つでなくても、その周りにいくつあっても同じことです。

**鎌田**　河合隼雄先生の「中空構造論」では、真ん中に「中空」と呼ぶ「あいだ」があって、そこからいろんな第三者が発生してくるという捉え方ですが、その点は共通したところがありますね。和辻哲郎は「あいだ」について、「神聖な無」という言い方をしています。いまだないものが存在する。

**木村**　私も和辻から教わったのです。元来、中国では「人間」は人と人の間、つまり「世間」という意味です。あるいは、人間として生きている期間という意味です。「人間到る所青山（じんかんいたところせいざん）あり」の「人間」ですね。それを奈良時代の日本人が１人ひとりの人という意味に読み違えて理解した。古代から、日本人は人がいるというときには「あいだ」を携えているというか、「あいだ」なしに個人はないということだったのだろうと思います。そうなると、ますます西洋人に翻訳して伝えるのはむずかしい。

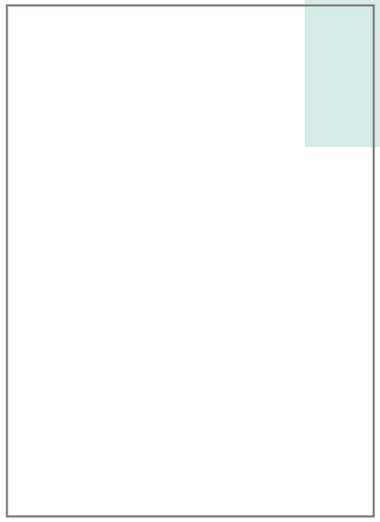
**河合**　たしかにそうですね。「あいだ」は空間的に理解されやすいが、すごく時間的なところもあります。

**木村**　いま、時間的と言われましたが、音楽にも「間（ま）」があります。武満徹さんと対談したとき、武満さんは「間というのは音と音の間にあるものではない。１音１音の中に間がある」と言われました。そうなると、「人間」についても、１人ひとりの中に「あいだ」があることになる。

**鎌田**　武満徹さんの『音、沈黙と測りあえるほどに』（新潮社）という本に書かれていますね。その「沈黙」というのが、木村先生の言われる「あいだ」で、プライマリーなものなのでしょうか。

**木村**　そうだと思います。私は学生時代にピアノを弾いていて、合唱の指揮もやっていたのですが、ある本に、ネコがピアノの鍵盤の上を歩いたときに出る音と、作曲家が作る現代音楽と、どう違うのかということが書いてあって、面白いなと思ったのです。そこで、音楽というのは、音と音をつなぎ合わせる、関係をつける、音と音の間をどう組み立てていくかの関係の芸術だと考えたのです。

私は京大の人文科学研究所の教授をしておられた長廣敏雄先生に音楽を教わったのですが、長廣先生も音と音の関係が大事だと話していました。たとえば、ドレミファソラシドのシの音は、放っておいたら半音上がってドに行く。そういう力をこのシの音は持っている。１つひとつの音がどういう力を持っているか、どういう音を目指すかが大事なのだと言われました。私が精神科の医者になった一番のきっかけはこのあたりかな。１人ひとりがどうこうというより、その「あいだ」がどうだというほうが大事じゃないか。この「あいだ」の研究をしたいという思いが強かったんです。



和辻哲郎（撮影：田村茂）

西田幾多郎（提供：石川県西田幾多郎記念哲学館）

## 多義性を持つ「もの」と「こと」

**鎌田**　医学の主たる領域は、身体という「もの」ですよね。先生はそうではなくて、「こと」とか「あいだ」に興味を持たれたのですね。

**木村**　「こと」も西洋の言葉では言えないでしょう。「こと」というと「出来事」の意味に取られますが、「出来事」はある意味でもう「もの」なんです。そこでずっと、固定しない、絶えず発生し、生成している状態を「こと」という。それを捉まえたかった。

**河合**　その意味では、「あいだ」も変わっていく。そのへんが精神医学にとっても心理学にとってもとても大事なことだと思います。

**木村**　西田幾多郎が「主語的論理」と「述語的論理」ということを言っています。文章の主語になれるのは、名詞で言える実体のあるもの、述語は、動詞、助動詞、形容動詞、そういう動きのある言葉を含んでいます。日本語で「何々というもの」「何々ということ」という２つの言い回しがあります。「というもの」に入る「何々」は名詞ですが、「ということ」に入る「何々」は述語的なあり方をしています。「あいだ」は一応名詞として言われるけれども、そのあり方は述語的です。「もの」ではなくて「こと」なのです。

**鎌田**　日本語では、「もの」自体も「こと」的といえます。私たちは科研で「モノ学・感覚価値研究会」というのをやっていますが、「もの」をいくつかの角度

から分析して、たとえば「もののあはれ」「ものぐるい」「もののけ」「つきもの」「物語」など、いろんな「もの」を考えていくと、「もの」というのは単純に物質ではない。霊的なこととか、目に見えない何ものかとか、いろんなものを含んでいて、実に幅広い多義的概念です。

**木村**　まったくそうですね。

**鎌田**　ドナルド・キーンさんが『源氏物語』を翻訳するときに、「もののあはれ」を“a sensitivity to things”と訳しました。このthingsは、「もの」「こと」という意味合いがありますが、英語に訳し切れないスピリチュアルな次元からマテリアルな次元まで含む日本語の「もの」を捉え切れない。「もの」「こと」「こころ」「あいだ」などの概念は、多義性とふくらみを持っていて、日常言語や根源的な存在感覚を言い表すときの想像力と関係しているので、非常に繊細ですが、重要な関係の絆になっているのではないかと思います。

## 「みんなに申し訳ない」という罪意識

**河合**　木村先生からご覧になって、日本の「こころ」は変化していますか、それとも変わっていないのでしょうか。

**木村**　これは絶対に変わらない部分と絶えず変化している部分とがあると思います。そういう意味で二重構造なんじゃないでしょうか。

**河合**　たとえば「うつ病の文化論」を提唱されていますが、日本人の罪悪感は変化したと思われますか。

**木村**　これは変化していますね。このごろのうつ病にはほとんど罪の意識が出てこないです。

ドイツに最初に留学したとき、行く前に研究テーマを何にしようかと考えました。ドイツ語の雑誌を読んでいると、うつ病の罪の意識を扱った論文に、罪の意識が一番出やすいのがカトリックで、出にくいのが仏教だと書いてあったのです。あるドイツ人の学者が、世界中のいろいろな地域で比較研究した論文です。そのころ、私は5、6年臨床経験がありましたが、それはすこし違うと思って、「日本人とドイツ人のうつ病患者の罪責体験の比較」を研究テーマにしました。それを書いたドイツ人は、実際自分でいろんな国の患者を診察していないのです。その国の統計とか、あるいはその国の精神科の医者から聞いた話だけで比較しているので、全然信用できない。自分で比較すればまた違ってくるだろうと思ったので、ドイツへ行って調べて比較しました。すると、罪責体験の出現頻度は日独でほとんど同じなのです。ただ内容が違っている。ドイツ人の罪の意識には「神様」が出てきます。あるいは神をいきなり持ち出さなくても、人間としてのあるべき姿というものが出てくる。

ところが日本人はそんなものは出てこない。「みんなに申し訳ない」という「みんな」が出てくるのです。それが人と人の「あいだ」ということです。「あいだ」というのは、実は西洋が「神」と言っているものの日本版ではないかと思いました。

その研究をしたのは1960年代ですから、もうほとんど半世紀前のことなのですが、いまでも、たとえば政治家が悪いことをして謝っている姿を見ると、必ず「皆様にご迷惑とご心配をおかけして申し訳ありません」という謝りかたをするでしょう。私は悪い人間だと言って自分を責めはしない。相手のあることとして自分を責める。これはどうやら変わっていない。ただ、罪の意識の出てくる頻度などは変わってきているかもしれません。

**鎌田**　とても面白いですね。日本人の、「みんなに対して申し訳ない」という感情は、別の言い方をすると、昔よく言いましたが、「お天道様が見ている」とか、「ご先祖様に申し訳ない」という言い方とも通底しますね。

**木村**　そうです。神さまは天高くおられますから、西洋の罪の意識の持ち方を私は「衛生中継方式」と呼んでいます。一方、日本の場合、超越というのはまず自分の足元へ潜り込んでいく。ご先祖様も地底におられて、草葉の陰に超越者を見出す。その違いでしょうね。

**河合**　超越というのを天から考える人からすると、日本人には超越とか罪悪感がないように見えてしまうのでしょうね。

**木村**　だから、ルース・ベネディクトの「罪の文化」と「恥の文化」のように、キリスト教の罪の文化は内面的で、日本人の恥の文化は外面的だという議論が出てくるのですが、それは大間違いだと思うのです。

**鎌田**　そこがとても興味深いところで、日本人なりの内面性をどう言語化できるかですね。

**木村**　私は和辻哲郎の影響が強いのだけれど、それこそ「風土」ということではないですか。風土が1人ひとりの人間の「こころ」にまで刻印されている。

## リンゴの気持はよくわかる?

**鎌田**　「こころ」をどこに見るかにかかわるのですが、昭和20年10月の敗戦直後に大ヒットしたサトウハチロー作詞の『リンゴの唄』に、「リンゴはなんにもいわないけれど、リンゴの気持はよくわかる」というフレーズがあります。美学者の高階秀爾氏がフランスでこの唄の話をしたら、リンゴは単なる果実で、どこに「気持」があるのかとまったく理解されなかったそうです。でも、日本人にはよくわかった。わかったから大流行した。これは、「こころ」はどこにあるのかと問うとき、人間の内面だけではなく、いろいろなところにあるという捉え方ともつながると思うんです。

**木村**　そう思いますね。「自然」と「自己」ということなのですが、両方に「自」という共通した文字が入っている。「自ずから」と「自ら」が、「自然」と「自己」に対応しています。根源的自発性みたいなものを東洋の人は感じとっている。西洋にも「ナトゥラ・ナトゥランス」（能産的自然）という考え方があるので、共通点はあると思います。

ところが、いまの西洋文明は元来、砂漠で育っているでしょう。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教は砂漠の宗教です。自然と言っても日本の自然と全然違って過酷なのですね。日本の自然はモンスーン地帯だから、その懐に抱かれていれば生きていける。あちらの自然は過酷だから、自然と対抗していかなければならないというところに西洋文明がある。ここが大きな違いじゃないでしょうか。ユダヤ教やキリスト教などの一神教は、日本の汎神教のように万物に神が宿るというのとは違うのですね。

## 『となりのトトロ』『千と千尋の神隠し』に読む戦後50年の変化

**鎌田**　先生のおっしゃる日本の変わらない部分については、私も大変共感します。では、変わる部分はどういうものかといったら、やはり日本の自然も変わってきている。

**木村**　自然が？

**鎌田**　はい。最近、日本の大衆文化の中で最もヒットした領域の1つはアニメーションですが、子どもたちに大人気だった宮崎駿監督の『となりのトトロ』というアニメーション映画があります。森の主である樹の精霊がトトロです。ところが、やはり宮崎監督の作品で、2001年に公開されてアカデミー賞を受賞した『千と千尋の神隠し』には、戦後50年経った平成時代の森が出てきますが、そこではもう森がなくなっています。宅地化して人間が住んで、川の主は「腐れ神」と間違われてドロドロに汚染されている。結局、トトロのような溌剌とした自然の神様は消えてしまい、ドロドロの状態になって疲れきっている。それをどうするのかという問題提起が『千と千尋の神隠し』にはあって、戦後50年の中で大きな変化があったことが前提となっています。その変化が身の回りにある。それがこころに、あるいは人間関係にどう反映しているのか、そういう問いがあると思うんです。

先ほどのうつも、自責の念がないということと、垂れ流していく、たとえば、森を切り崩してヘドロが川や海に溜まっていくという事態とパラレルだという感じがします。

**木村**　自然にも、やっぱり変わっていく部分と変わらない部分があるでしょうね。

**河合**　それから、われわれが出会うものとしては、罪悪感とか内省というものがない患者さんとかクライエントがものすごく増えてきました。

**木村**　増えていますね。

**鎌田**　カウンセリングをやっていて、いつごろからそういう傾向が始まったと感じられますか。

**河合**　私の感じでは、90年代に解離性同一性障害（1人の人間に複数の人格が現われ、自我の同一性が損なわれる障

『となりのトトロ』(Ⓒ1988 二馬力・G)
(提供:ウォルト・ディズニー・スタジオ・ホーム・エンターテイメント)

『千と千尋の神隠し』(Ⓒ2001 二馬力・GNDDTM)
(提供:ウォルト・ディズニー・スタジオ・ホーム・エンターテイメント)

害）がたくさん出てきました。それがまず１つの大きな波です。その後、発達障害といわれる人々がものすごく増えてきました。

**木村**　解離も発達障害も、私の現役のころにはこれほど表立っていませんでしたから、ここ十数年のことです。

**河合**　そうです。罪悪感と内省って神経症構造ができるためにとっても大事な要素なのだけれども、それがない人が増えてきています。さっき鎌田さんの言われた『千と千尋の神隠し』はまさに解離の世界です。

**鎌田**　そう言われると非常によくわかる。

**木村**　私は全然知らないのですが、たとえばどんなことですか。

**河合**　あの世に行ってしまうと、名前が変わるのです。

**鎌田**　生のリアリティがない。

**河合**　解離してしまわないと自然とか神に出会えない。そういうふうにも読めるわけです。

**木村**　ああ、そうですか。

**鎌田**　『となりのトトロ』の場合、２人の姉妹はしっかりと大地に根差している。まだ在世感がある。『千と千尋の神隠し』では、自分が半透明になっているというのも象徴的でしたね。自分自身があちら側に行って透明になるので、自分の実体、体の感覚も非常に希薄化してしまう。「カオナシ」という登場人物も、そういう何か得体の知れない不定形な形がうまく表象されていましたね。

**河合**　そうですね。

## インターネットでつながる「あいだ」

**畑中**　私は心理臨床をやっていますが、本を読むと、うつは怒りとか罪とかと関係があると書いてあるけれども、まだここ数年の経験で、罪の意識がある人に会ったことがないように思います。若い世代の人を中心にお会いしているので、そういう人たちはもう「あいだ」なんてないのかなと思っていたのです。でも、木村先生のおっしゃった、日本人なりの内面性という捉え方は面白いですね。ひょっとすると、インターネットでつながるのも「あいだ」をつくっているのかもしれないと思いました。

**木村**　それはどうでしょうか。私はメール止まりなのであまり発言する資格はありませんが、面と向かって出会わないと「あいだ」というのは働かないように思います。インターネットで「関係」はできます。でも「関係」と「あいだ」は違いますね。

**畑中**　ただ、インターネットで日記を書くのは、自分のことを書きたいからというより、みんなから反応をもらうためにやっていますから、同じ趣味の人が集まるのは「あいだ」をつくろうとする動きの１つかなと思います。

**鎌田**　私も畑中さんの意見に同感するところがあります。インターネットは、不特定多数に開かれているけれども、ある種閉鎖的で濃密な関係性を築く面もある。最近、ミクシィ（mixi）というネット上のバーチャルな共同体があって、そこでのやり取りはとても密になってきています。そういうところで自分なりの存在意義を感じとっている人もいる。外とは接触を持てなくても、その中では居場所を持てるという若者もいると思います。

**河合**　昔なら引きこもって、どんな人間関係も持てそうにない人が、ネット上では関係を持てたりするわけです。そういう人がネット上の人と実際に会って、いきなり肉体関係を持ったりする。そのへんはカウンセリングをする上で今後の大きな課題です。

**鎌田**　河合さんは村上春樹の小説などを取り上げながら、現代の若者のこころのありようとかこころの構造を考察する手がかりにしていますね。村上春樹や吉本ばななど、比較的若い作家の文学作品とか表現の中に、いまの若い人たちのこころを代弁するような部分があると思うんです。村上春樹なんかは特にそういう世代の支持を得ている。それを手がかりにして考察することは、１つの現代文化論として重要です。

**河合**　そう思いますね。

## 本末転倒の世界

**鎌田**　ところで、ブログなどはとくに文体が大事です。テンポやフィーリングに惹かれて読んでいきますから。

**河合**　実はブログでは内容はあまり大事ではなくて、文体とか、何かと出会えている感覚とか、そちらの方が大事な気がします。

**木村**　出会えている感覚というと？

**鎌田**　たとえば、キティーちゃんのようなキャラクターやフィギュアを持っていて、それを共有する感覚を通してつながっている。いま、子どもたちは自分１人が変わっているということをすごく恐れます。小学生など、教室の中で変わった行動をしたり、浮いてしまうことをとても恐れていて、それを抑えようという動きがある。そこで、フィギュアによって結ばれているような関係性がさらに強くなるのかなと思います。

**畑中**　私が面白いなと思ったのは、ミクシィのコミュニティで「双子募集」というのがあるのです。双子になりたい人を募集して、自分と同じような人がいたら、その人と実際に会って、同じ格好をしてみる。そして、町に出ていっしょに歩いて楽しむ。

**鎌田**　その先はどうなるのですか。歩いて、楽しんで。

**畑中**　ただそれだけです（笑）。もしそこでずれが発見されたらその人とはバイバイで、また新しい双子を募集する。それは内省とはほど遠いというか。

**木村**　私が自分の文体を大事にするというときは、オリジナリティーを大事にしますが。

**河合**　いまはそうではないのです。

外務省のカワイイ大使
外務省は日本の若者文化を海外に紹介するために、女優の藤岡静香さん、ミュージシャンの木村優さん、モデルの青木美沙子さんに「ポップカルチャー発信使（通称カワイイ大使）」を委嘱した（2009年２月26日）（提供：時事通信社）

**鎌田**　私は木村先生の本を読んでオリジナリティーを感じて、人柄とか思想性に共感します。ところが、最近の子はそういうところに着眼しない。そこに独創性を見ないみたいですね。

**河合**　二次創作がそうですね。ある作品があったら、それをパロディーにして、いかに面白く書き直すか。

**畑中**　元の作品のキャラクターはそのままに、自分なりに面白くストーリーを書き直したりするようなことですね。

**鎌田**　たとえば、『となりのトトロ』だったら、元の物語をベースに、キャラクターはそのまま、シチュエーションとかストーリー展開を作り変えていく。ことによるとポルノにしたり、いろんなものに変えたりする。そういう市場としてコミック・マーケットというのがあるんです。たとえば、木村敏さんなら木村敏さんのオリジナルがあって、そこから自分たちが別の枝葉をつくって、つながっている。

**木村**　面白いねえ。

**鎌田**　本末転倒の世界というか。本のオリジナリティーより、末の方が茂っている。

**河合**　考えてみたら、日本人は昔から本歌取りとか、本末転倒文化みたいなところがありますね（笑）。

**木村**　それは日本特有の現象ですか。

**畑中**　欧米にもありますが、日本が一番すごいです。

**河合**　日本は、アニメをはじめ「オタク」文化を世界中に輸出しているんです。「オタク」はフランス語になっています。

**鎌田**　“kawaii”という言葉も世界共通語になっていますね。

## 主語的主体と述語的主体

**畑中**　実際の「もの」を共有していることがすごく大

鴨川のユリカモメ（提供：京都フォトライブラリー NET）

今西錦司（撮影：吉田功）

事だという気がするのです。「こと」の世界ではなく、具体的な「もの」とかキャラクターを通して、自分たちがつながっていることを確かめているように思います。

**河合**　言い方を変えると、「こと」への信頼がなくなっているのかなという気もします。

**鎌田**　罪責感にはネガティブな面もあるけれど、深く自分自身を考え直すことにもつながります。罪責感を持たない場合、自分を振り返るとか、見つめ直すというのはどういうふうになるのでしょうか。

**畑中**　深まるという感じはまったくないですね。

**河合**　本来自分のために書く日記をブログで世界に配信していること自体が、もう内と外がひっくり返っている。そうなると心理療法はどうなるのだろう。内面化していかないので、むずかしい。

**鎌田**　木村先生は、日本人にとっては「あいだ」の方がプライマリーだと言われました。たとえば「音」と「沈黙」であれば、「沈黙」のほうにプライマリーな１つの力というか、リアリティがあった。それが日本の根本的な世界存在感覚だとすると、いまのような非常に表層的なもの、フィギュアやキャラクターでつながっているのは、ベースになるものが失われているということですね。

**河合**　私の見方では、ヨーロッパは「主語的主体」をつくってきた文化である。「述語的主体」の日本にとって、グローバル化というのはとてもシビアで、主語的主体になれるかというと、そうでもない。それで違う形を模索しているのだと思います。

**鎌田**　浮遊しているような感じです。

**木村**　要するに、日本では主語的なリアリティーの方がバーチャルなんだ。

**鎌田**　「主語的主体は偽物っぽい」というような感覚は、日本人の中にはずっとあったんじゃないでしょうか。

**河合**　一方で、主語的主体に飽き飽きしている西洋人は、日本文化を面白いと感じる。

**鎌田**　ある種の西洋文化の病理を担っている人たちは日本文化を面白がるところがあります。しかし、日本人がその先に何があるか見えているわけではないんですね。

## 鳥の渡りを決めるものは？

**河合**　ユング派のジェームズ・ヒルマンから聞いたのですが、今日、アメリカではカウンセリングがあらゆる分野に入っていて、潤滑油としてのカウンセラーがいなかったら、もう社会は回らない。だけど、カウンセラーは、昔の精神科医やサイコセラピストが持っていたような、「魂とはなんだろう」という問いを誰も持っていない。いま、むしろそのような原理を問おうとしているのは、問い方はちょっと違うけれど、脳科学者のほうだ。精神医学と心理学の将来はこれからどうなるのだろう、というのです。

**木村**　大きな問いですね。こころをどう理解するかにもよりますが、私自身が理解する「こころ」は、脳には依存していない。脳を必要としていないと思うのです（笑）。たとえば、この研究所の前を流れている鴨川にはユリカモメがたくさん飛んでいるでしょう。渡り鳥は大勢で一斉に遠距離を渡るのですが、ある場所を飛び立って、何千キロか何万キロか離れた目的地まで、いったいどういう申し合わせで渡っていくのかを考えたことがあるのです。動物行動学の人にいろいろ質問をしてみたけれど、答えが出ていないようです。私の勝手な解釈ですが、渡り鳥の群れ全体が１つの個体なのだろう。その群れが気象条件などに応じて決心して渡るのではないか。そうすると、その群れには脳はないわけです。１羽１羽には脳があります。渡る目的は繁殖ですから、脳がコントロールして繁殖をする。しかし全体をコントロールしている脳というものはないのじゃないか。

このアイデアは今西錦司さんの「種の主体」という考えからヒントを得ました。ダーウィンの個体単位の進化論ではなく、今西さんの、「種は変わるべき時が来たら変わる」という考え方はすごいと思います。脳は各個体の運動や感覚を制御していますが、最も大事な渡りには、各個体は何も決定権を持っていない。そして、人間もそうじゃないかというわけです。

「あいだ」がプライマリーだと申しましたが、「あいだ」からは単に２人ではなく、場合によっては無数の人間がそこから派生しうるわけです。これは渡り鳥がモデルです。

**鎌田**　沖縄の八重山諸島には、いつやるか決まっていないお祭りがあります。島の人によると、「波がやってくると始まる」と言うのです。

**木村**　それはよくわかる。渡り鳥の論理です。

**鎌田**　波が来ると、群れが決心するのと似たような形で祭りの日が決まって、みんなの力がぎゅーっと求心化していく。

**木村**　そういうものは100年、200年単位の話ではない。今西さんの「種の進化論」だと、種が変わるときは、先駆者もいるし落ちこぼれもいるけれど、全部が変わるという。でも一斉に変わるわけではないんですよ。これは面白いですね。

**鎌田**　群れが決心するというのは、西田幾多郎の「場所的論理」と同じですね。

**木村**　そうです。まさに「場所」が「あいだ」ですから。脳とはまったく無関係です。

**鎌田**　突然、一遍上人の話になりますが、『一遍上人語録』で大変惹かれたのが、南無阿弥陀仏というのは人間が唱える南無阿弥陀仏じゃなくて、吹く風、立つ波、この森羅万象すべてが南無阿弥陀仏である。そして、人間が極楽往生するというが、そうではなくて、「南無阿弥陀仏が往生する、南無阿弥陀仏が南無阿弥陀仏する」という論理なんです。

**木村**　そうですね。西田幾多郎も、「物来って我を照らす」という言い方をしています。私が物を見て、物の存在を確認するのではなく、物が私の存在を確認させてくれるという意味です。いまの一遍上人の話も同じだろうと思います。「場所」あるいは「群れ」、「種」と言い直してもいいですね。

**河合**　そう考えると、本来の心理療法はそういう動きを取り戻す場所になっていますね。

**木村**　患者さんと私の「あいだ」というものがそこに実現されればいいわけです。患者さんとのあいだで何かが熟してきているという感覚、妙な感覚ですが、それを持てたら、その人はかなりよくなりますね。

**鎌田**　熟してきているという感覚は、たぶん群れが決心するというのと同じだと思います。ミクシィの若者の時代も、そういう群れが決心する過渡期なのでしょうか。

**木村**　ひょっとすると、人類の進化史上で１つの曲がり角にいるのかな。

## 脳を動かしている「何か」

**鎌田**　なぜ「群れが飛び立つ」のかは、実際にはまだ解明されていませんね。

**木村**　動物行動学の人に頑張ってもらわないといけないが、解明はむずかしいでしょうね。個体が動くには、脳が道具として必要ですが、しかし脳を動かしている何かがある、と私は思っているんです。精神科の病気でも、脳が冒されているから、症状が出てくる。脳がその症状を出さざるをえなかった何かがあるわけです。私はその何かが本当の意味での病気だと思うのです。

**鎌田**　いまの生物学的な精神医学では、遺伝子の解析やドーパミンやノルアドレナリンやセロトニンなどの脳内神経伝達物質がどう作用するかというエビデンスの研究がほとんどで、「脳を動かしている何か」という、より根源的な問いは少ないように思いますね。

**木村**　誰かが出てくれば変わる。やっぱり人だと思うのです。心理学でも、たとえばフロイトやユングが出てこないと、ことは始まっていなかった。私は精神医学全体がこれからどちらに向かうかということにはあまり関心がない。そのうち誰かが出てくることを期待しています。

**河合**　先生のいまのご発言は、洗礼者ヨハネみたいですね。その予言の言葉で終わりにしましょうか。今日はどうもありがとうございました。

Ben Kimura + Toshio Kawai + Toyi Kamata + Chihiro Hatanaka

研究紹介

# アフリカの森で考えるこころ観

大石高典 Takanori Oishi
（こころの未来研究センター特定研究員）

## 言語で表わされる「こころ」と非言語的な「こころ」

日本語の「こころ」という言葉は、響きが美しい。そして単純に英語の heart や mind や spirit に置き換えることができない多義性と曖昧さをもっているところが魅力である。この一見とらえどころのないようにすら思える「こころ」という概念は、世界の人類文化の多様性の中に置いたとき、どんな位置づけになるだろうか。

あえて、私たちが「こころ」という日本語を使ってものごとを考え、世界に発信していくためには「こころ」が表わすものの普遍性と固有性を十分に踏まえ、地球上の様々な文化に属する人々にわかりやすく説明できなければならない。なぜ「こころ」なのか、「こころ」でしか表せないものはあるのか、あるとすればそれは何なのか?

これらの問いに答えられるだけの検討が必要になる。

この問題に対して、さしあたり、2つのアプローチが考えられる。1つは、地球上のさまざまな社会における「こころ」に類似した言葉や概念が表わす主観的な意味を文献資料やコーパス資料を用いて通文化的・通時代的に比較するという方法であり、2つめは、「こころ」がどのように行為者の間に立ち現れるのか、という現象としての「こころ」をなるべく客観的な方法で観察することにより、非言語的な、より生物学に近い次元から「こころ」の意味するところを解きほぐしてゆくという方法である。

## こころ観を探る手がかりとしての動植物

ここでは、異文化におけるこころ観について、私の調査地である中央アフリカ・カメルーンの熱帯雨林の中の焼畑農耕民であるバクエレ社会での経験から考えてみたい。

まず、「あなたにとって、こころって何だと思いますか?」といきなり尋ねることはできない。このように問われれば、質問の意図が分からずたじろぐか警戒するのが普通である。しかし、こころ観を探るてがかりは、具体的な他者やものとの関わり合いの中から探ることができる。

例えば、動物や植物との関わりの中にこころ観の一端をかいまみることができる。熱帯林には、蜜を分泌したり、住み場所を提供して強い顎をもったアリを呼び寄せ、植物に襲いかかる動物から守ってもらうという防衛共生を行う植物が多く知られており、アリ植物などと呼ばれる。バクエレの人々は、この一種であるレゴックゴン（*Barteria nigritiana*, PASSIFLORACEAE）という植物に恋愛成就のまじないをかける。この兵隊アリがウジャウジャと這いまわる樹皮に小刀で引っ掻き傷をつけながら、意中の相手の名前を唱える。アリはナイフに噛み付き、手にまでよじ登ってきて食らいつく。木の幹に傷をつける回数は多い方がよく、目当ての女性が求愛を受け入れてくれるまで毎日繰り返す。唱える願い事は決して他人に聞かれてはならず、この祈願を行っている様子を他人に見られては効果は水の泡になる。これを行うことにより、この植物とアリのように男女がいつでも一緒にいられるようになるのだという。バクエレの人々は、アリと植物の共生関係を観察し、それを自分たちの身近な関係に読み換えているのだが、アリに手を刺されながらの文字通りの行は愛のなせるわざであろう。自らに苦痛を与えながら、願いをこめる仕方は日本の「お百度参り」や「丑三つ参り」にも通ずる。

バクエレ人に「願掛け」の対象とされるアリ植物 *Barteria nigritiana*

熱帯林に生息する多くの植物は、身体症状だけでなく、自分や他者のこころ、そして場合によっては狩猟や漁労の対象となる動物のこころに対して効く「薬」である。名前のつけられている植物の多くにそのような力があると信じられている。

## 森の民の「こころ」の行方

アフリカ各地の森とその住民は、熱帯林伐採などの開発と自然保護の間で揺れている。例えば、カメルーン東南部を例にとっても、1960年のフランスからの独立前後には強制的な移住や定住化が行われ、70年代からの伐採会社の進出、90年代からの自然保護政策の実施と国立公園の設定が行われた。こういった変化は、一方的に外部から押し付けられたものだったと言える。東南アジアや南米アマゾンの多くの地域と同様に、これら外部からの介入は森の景観を変え、人々の生活に貨幣経済を浸透させた。過去50年間に起こった変化は、物質的にも精神的にも大きく森に依存して生きてきた人びとの「こころ」やこころ観にどのような影響を与えつつあるのだろうか。

アフリカの森に棲む人びとが、これからどのような未来を選択してゆくことになるのか、多角的なアプローチから人びとの置かれている客観的な状況を明らかにしてゆくのと同時に、人びとのこころがどちらの方向に向かってゆくのかを理解するためには、食事や生業活動などの眼に見える生活の変化とともに、こころの動態を含めたホーリスティックな人びとの生態を探る学際的な研究が必要だろう。

ブランコ遊びをするバクエレ人のこどもたち

## 日本とアフリカをつなぐ

海外での調査から日本に戻ると、行き交う人びとの顔が暗く見える。私だけでなく、多くの人が同様のことを感じていると聞く。比較的小さい社会で、自然と深くかかわり合いながら、人間どうしが互いの存在を確かめ合いながら生きるようなあり方とは対極的な疎なコミュニケーションの取り方をしている私たちの日本の生活だが、意外に共通するこころ観を持っていたりする。こころ観研究を進める中で、差異を大事にしながらも日本とアフリカの同時代を生きるこころとこころの間に新たなつながりと相互作用を生むような仕組みを作っていけたらと願っている。日本の「こころ」は、決して孤立しているのではなく、世界のこころとつながっている。

カメルーン東部州の熱帯雨林をつらぬく伐採道路

研究紹介

# 病気の子どもと日常を繋ぐ

## ――院内学級と復学支援について　スウェーデンの場合

近藤（有田）恵　Megumi Kondo Arita
（こころの未来研究センター特定研究員）

### 病気の子どもと学校教育環境

病気の子どもと学校と聞くと、どこかピンとこない人も少なくないだろう。病気なのだから、まずは病気を治してから勉強すればいいのではないか。そんな声が聞こえてきそうである。一口に病気といっても、短期間で治ってしまうものもあれば、一生付き合っていかなくてはならない心身の病もある。年に何回もの入退院や、時に1年以上にも及ぶ入院生活の中で、子どもたちの生活にとって、大切なものは何か。

子ども（就学期）の日常において、同年齢、異年齢とのかかわりという観点からも学校という存在は、子どもの日常で重要な位置をしめる。そんな日常を支えるために、院内学級がある。病気を持つ子どものトータルケアという観点にたてば、単なる学校教育の場としての院内学級の設置だけではなく、医療者と教育者をはじめとする他職種の協働は急務であり、病名告知、家族支援における心理・社会問題も包括的に考える必要がある。しかしながらわが国においては、教育と医療、さらには地域の連携については必ずしも明確にされていない。そこで本研究では、トータルケアの中核を心理・社会問題におき、ここを明らかにしていくことがねらいである。

### 病気の子どもの学校教育の現状

わが国においては、文部科学省の指導の下に、特別支援教育という枠組みの中で、病弱虚弱教育が行われている。児童期の発達において重要とされるのが、学校生活および同世代との交流である。このことから、病気を持つ子どもの生の充実を考える際には、学校生活を切り離して考えることはできない（例えば船川、1994年a：1994年b）また乳幼児期から青年期という若い時期に、ターミナル期を含め、入院生活や闘病生活を余儀なくされる彼女ら・彼らに関するケア研究が進む中で、同年代の健常児にとって生活の中心をなす学校生活がトータルケアの一部分を担うものとして注目されている（例えば谷川、2006年）。しかしながら、ケアの一部分としての学校教育については、わが国においてはまだ整備が不十分であり、現場教師の手探り状態が続いている（武田・笠原、2001年）。ケアとしての教育プロジェクトの整備が完備されたならば、病気と闘う子どもたちのよりよき生を支える一部となり、彼女・彼らの生の質（QOL：Quality Of Life）の向上に資するものとなるであろう。

しかしながら、学校教育の内容や病院内教育から復学へと移行するにあたっての地域や学校との連携などについては議論が十分とはいえない。加えてその教育は、内容や方法について、当該児の親、病棟などとの連携が不可欠であるが、実際に、どのような内容を教育に含めて行うのかということに関してはまだ議論が不十分である。そのため、臨床現場においては、教師が個々の対応を迫られている。ターミナル期の子どもにとっての教育は、健常児の教育とは違う意味を持ち、トータルケアの一部を担うものとして捉え直す必要があり、トータルケアの一部分としての教育についてもその位置づけ、内容に関しては今後の課題として残っている。わが国には病院内学校、院内学級の設置が小児科を有する病院において必ずしも義務化されていない。そのため、入院中の子どもの教育に関しては、個々に任されており、統一したカリキュラムの構築にまで至っていない。また、わが国においては、教育と医療の連携については必ずしも明確にされていない。トータルケアという観点にたてば、医療者と教員の協働は急務であり、病名告知、家族支援における心理・社会問題も包括的に考える必要がある。そこで以下では、高度に発達した福祉国家を持つとされるスウェーデンに注目し（Esping-Andersen, 1990）、他職種との連携も含めてどのように院内学級が運営されているのかについて、在イエテボリのクィーン・シルビア子どもホスピタルを例に見ていきたい。

### スウェーデンの場合

スウェーデンでは、小児がん患者の生存率が世界でもっとも高く、病気を持つ子どもの学校教育においても手厚い環境が整っている。「日常を生きる（live a moment）」ということを大切にクィーン・シルビア子どもホスピタルの院内学校は日々、子どもたちの日常を支えている。まず、福祉システムについてであるが、スウェーデンでは、1960年代に入院施設を有する小児科を持つ病院には、病院学校の設置が義務づけられ、学校運営は地方自治体が行う体制が整えられている。また、原籍校に対して、在籍している子どもへの教育責任を明確にし、たとえ病院から遠く離れた地方にある学校であっても、最低でも週に一度は、原籍校の学習の進み具合、課題などを病院学校に報告するようになっている。次に建物としての病院学校は写真に見られるように、年齢に合わせたプレイルームや図書館、そして、受ける治療に対しての不安を除くための治療準備の部屋も備えられている。病院学校での教育は、教室での教育の他にベッドサイドでの1対1の教育も行われている。病院学校での教育は、単に学科を教えるだけではなく、自分の病気や治療を受け入れること、また、抑圧されがちな気持ち（不安や希望）の表出、さらには同世代との交流を大切にし、まさに、子どもの日常を支える形でつくられている。また、がんを患う子供に関しては、がんチームが組まれ、他職種による連携が組まれている。がんチームに関しては、病気の子どもだけではなく、両親や兄弟に関するケアも整えられており、その子の生きる世界を包括的に支える体制が整えられている。また、復学にあたり、医療の連携とともに、専門看護師によって原籍校の教員および生徒への病気の説明などがなされ、病気の子どもと日常の橋渡しも行われている。病気を持つ子どもが、闘病に入る前に生きてきた日常を、たとえその環境を離れても、そして、再び日常に帰っていく時も、その繋ぎ手としての教育、医療がそこには存在する。

スウェーデンのクィーン・シルビア子どもホスピタルのプレイルーム（上）と日常の生活の場

### 今後の展開

ごく簡単にではあるが、スウェーデンの例を紹介した。今後は日本においても、トータルケアとしての他職種と病院、地域の連携が確立され、地域、他職種との連携を核とした病気を持つ子どもの心理・教育的対応に関するモデルを提示し、福祉政治、医学、教育学、心理学といった学際的な視点から子どもの生きる心理・社会的環境の形成案を提示することが望まれる。

**参考文献**

船川幡夫、1994年a「入院中の慢性疾患児とその教育」『小児保健研究』53:143-148。

船川幡夫、1994年b「全国医科大学における慢性疾患長期入院小児と教育の現状」『小児保健研究』53:125-133。

武田鉄郎・笠原芳隆、2001年「院内学級における学級経営上の課題と教育支援」『発達障害研究』23（2）、126-135。

谷川弘治、2006年「病気の子どものトータル・ケアと教育支援システム」『教育と医学』54:512-522。

Esping-Andersen, Gosta., 1990, The Three Worlds of Welfare Capitalism, Cambridge: Polity Press. エスピン＝アンデルセン、2001年『福祉資本主義の三つの世界――比較福祉国家の理論と動態』岡沢憲芙・宮本太郎監訳、ミネルヴァ書房。

座談会

# ネット時代のこころを探る

**インターネット時代を迎え、人のこころのあり方、あるいはこころの捉え方はどのように変わりつつあるのか。常識にとらわれないウェブサービスの会社「はてな」を運営する近藤淳也さんをゲストにお迎えし、センターの助教が縦横に議論する。**

近藤淳也 Junya Kondo
（株式会社はてな社長）
内田由紀子 Yukiko Uchida
（こころの未来研究センター助教）
平石 界 Kai Hiraishi
（こころの未来研究センター助教）
森崎礼子 Ayako Morisaki
（こころの未来研究センター助教）

## 個室文化から開かれた場へ

**内田**　近藤さんの運営している株式会社はてな（以下「はてな」）はウェブサービスの会社ですが、提供しているサービス内容とともに、ユニークな職場づくりでも注目されています。場づくりは集団にすごく影響しますね。

**近藤**　僕はそういうことにとても興味があるんです。アメリカへ行ったとき、ヤフー（Yahoo!）さんとグーグル（Google）さん*1を訪問させてもらいましたが、オフィスを見れば考え方やコミュニケーションの仕方が全然違うことがすぐわかる。ヤフーはけっこう高いパーティションで仕切られていて視界がさえぎられて外があまり見えないんです。グーグルはガラスで仕切られていて、３人部屋とか４人部屋でけっこう狭いんですが、その人たち同士はすごくしゃべっている感じがあります。 そういうことは参考にさせてもらっています。

「はてな」のトップページ

**内田**　「はてな」はラボみたいなイメージかなと思うんです。いろんな人が一緒の部屋にいて、自由に議論もできるというような感じ。個室にこだわらない。

**近藤**　そうそう。

**内田**　場というのは、アウトプットであるとか、社のイメージにすごく反映すると思います。大学はどちらかといえば個室文化で、自分の領域を守っていくというのが強い。例えば、心理学にしても、いま、認知心理学、進化心理学、文化心理学などに分野が細分化されていますが、心理学だけではなく、ほかの学問分野も細分化の傾向にあります。

**近藤**　それで「学際」が叫ばれているわけですね。

**内田**　そうです。とくにこころの未来研究センターはそこがポイントです。心理学はとくにそうで、例えば、私は社会心理学とか文化心理学をやっていますが、社会とか文化とこころの仕組みを考えるとき、どうしてもそれだけでは足りない。社会がどんなふうにこころに影響するのかを考えるには、生得的な要素とか、人間がどんなふうに物を見るのかといったベーシックな理解が必要ですが、自分の専門分野しかやっていなかったらそこはわからないわけです。たぶんいままでは、「そんなものはほかの人がやっていることで私には関係がありません」みたいなスタンスでもやってこられたのですが、それではこころを理解できませんね。センターでは細分化を見直して、いろんな人が寄り集まって１つのものをつくっていこうという方向性なんです。例えば、私と平石さんはオフィスをシェアしています。そういうのも、なかなかないことではないかと思います。

**近藤**　なるほど。いいじゃないですか。

**平石**　僕はいいと思っているんです。まだ１つのデータを一緒に扱う共同研究というところまでは行っていないけれども、授業を一緒にやったりしています。

近藤淳也

内田由紀子

平石界

森崎礼子

**近藤淳也**
**プロフィール**
株式会社はてなの創業者・代表取締役社長。1975年愛知県生まれ。京都大学理学部入学。サイクリング部に所属し、20歳の時、自転車でアメリカ大陸を横断。同大学大学院理学研究科へ進むが２年次に自主退学、プロカメラマンとしての活動を始める。2001年、有限会社はてなを設立し次々と新サービスをリリース、日本有数のコミュニティサイトとして成長を続けている。著書に『「へんな会社」のつくり方』（翔泳社）がある。

## いかに活発な議論を起こす場をつくるか

**平石**　近藤さんの本『「へんな会社」のつくり方』はとても面白かった。インターネットの世界でウェブサービスとしてやっていることと会社のつくり方が対応していて、どちらもオープンにして、みんなでどんどんディスカッションをして、楽しくやっていこうというモチベーションが徹底されている。それは爽快感があって、気持ちがいいなと思いました。

**内田**　それが物をつくったり新しいアイデアを生み出したりする原点だと思います。

**近藤**　いままではトップダウンで、「これをつくれ」「つくります」みたいなのが多かったですからね。

**内田**　従来のシステムは自分を守る感じがします。あまり突っ込まれたくないから。これを導入しましょうというときに、それじゃ困るというところが必ずどこかから出てくる。例えば、自分がいままでやってきたことを批判されるのは困るとか。いろんな分野の「守りたい」がきっとあるんだと思います。でも、守ることよりも、何かをシェアすることのほうがメリットがありますよね。近藤さんの本を読んだらきっと納得できるんだと思いますけれども。

近藤淳也『「へんな会社」のつくり方』（翔泳社）表紙

株式会社はてなの会議は立ったまま行なわれる

**近藤**　物をつくることに関して言えば、僕は正しいとされているものは、基本的に全部謎だと思っているんです。こういう方向で何かやろうといったときに、その中で一番面白いとか、一番人が集まるとか、一番もうかるとか、そういう最適化を見つける。それが何であるかは、僕はすごく謎だと思うんです。謎なものに取り組むのに、トップダウンでだれかが決めたことが唯一正しいということはない。なるべくたくさんの意見が入って、なるべくいろんなことを試して、その中から適切に選べたほうが最適化に近づくと思う。

　僕はいかに意味のある活発な議論を起こす場をつくるかに興味がある。それがたぶん「はてな」につながっているのかなと思います。

**平石**　そういう考え方が、サイエンスとまったく同じだなという印象です。何が真実かはなかなかわからない。わからないことについて、いろんな人がいろんな研究をして、論文を書いて、みんなでディスカッションをして、何が本当に正しいのかを見つけていきましょうということが理想的なサイエンスの姿で、それとすごく近いなと思います。

**近藤**　「はてな」でサービスをつくる話でいうと、責任者は１人なんです。そこがすごいバランスで、だれでも意見を言いやすいような環境をつくるんですが、最後は責任者は１人にしているんです。

**内田**　それは、それぞれのプロジェクトごとにですか？

**近藤**　そうそう。「ディレクター」といっているんですが、サービスごとにディレクターを置いて、かなり権利を集中させるんです。このサービスについての仕組み、テキスト、デザイン、どんなキャンペーンをやるか、広告を入れるかどうかも、全部ディレクターが決めます。

**森崎**　そのディレクターはどうやって決めるんですか。

**近藤**　実績ですね。ウェブのサービスはエンジニアかデザイナーがつくるんです。あとは、ライターがちょっといる。エンジニアかデザイナーで、そういうサービスをある程度自分で考えてつくれて、人を集める能力のある人がディレクターになる。基本的に、ディレクターが何かやりたいと言ったとき、それを実行する一番いい方法は何であるかということに対して、たくさんの意見を出すのはすごくいいことなんですが、会議で決めるのは間違いだという考えでやっています。話し合いで決めると、全然面白くないものができる。

　サービスに関しては、どうしても作家性みたいなものがある。何でもいいから何か１つ筋が通っていてほしいんです。例えば「はてなダイアリー」というサービスは、基本的に、同じ興味の人とつながれることがうれしいという価値観で統一されています。でも、そんなのとつながりたくないという人もいる。それもある意味、正しいんです。でも、それは価値観の問題であって、どちらか１本にしないと、何が言いたいかわからなくなってしまう。

　アップルの製品が人気なのは、やっぱり１人の人が「これがいい」と言って１本筋を通している。日本の家電製品を見ていると、あの機能もこの機能も全部入れてあるでしょう。だけど、特徴を出すということは、いかに削るかなんです。そういうのは、１人が「いや、それは違う」と言って、とくに根拠がなくても切れる力がないとできないことです。

## コミュニティ・サイトは人の成長を促す装置

**平石**　「はてな」は社内もすごくオープンにしていますが、サービスのユーザーとの間もすごくオープンにしていますね。

　社内のいろんな会議も録音して公開してしまうということも近藤さんの本に書いてあった。うちはこういうふうにやっていますというのがあれだけオープンになっていると、ユーザーのほうも信頼できるというメリットがあると感じました。

　近藤さんの本の最後のほうで、徹底してユーザーを信頼するみたいなことが書いてありました。それはすごいなと思うんですけれども、信頼することにはリスクもある。世の中に悪意を持っている人は当然いるだろうと考えたとき、徹底して信頼してオープンにするという「はてな」の方針がどうやって生き残ってこれているのかなと思ったんです。

　自分の専門とからめて言うと、僕は協力行動はどうして進化するのかという話をずっと考えているんです。基本的な発想は、生物はみんな利己的である。利己的な個体が、お互いにちょっと譲歩し、ときどき協力し合うことで、トータルとしてはメリットが得られるという考え方です。自分が相手を助けるということは、その瞬間は自分にとってはデメリットだけれども、後で返ってくることが保証されていれば大丈夫だよねという話なんです。だけど、返ってくる保証はどうやって得られるのか。これまでの生物学の理論で言っているのは、お返しをしないやつに対しては懲罰が下る、そういう発想なんです。

　でも、「はてな」はそうではないですね。信頼して、オープンにして、情報を出してしまう。例えば、「はてな」のサービスを悪用して何かやってやろうという人たちに対して、どういう対処をしているのですか。

**近藤**　ユーザーがいい行動をする原因は何なのかというと、ほかのユーザーが何か言うというのがあります。例えば、グーグルと「はてな」が違うのは、グーグルは道具だと思うんです。目的があって使うもので、目的がないのに行くところじゃない。検索が必要だから検索エンジンをやるのであって、暇だからといって検索エンジンなんかしない。でも、「はてな」は場なんです。べつに目的がなくても、何か面白いことはないかなと思って見にきたりとかする場所だと思うんです。「コミュニティ・サイト」といいます。

　コミュニティって、街みたいなものじゃないですか。街の行政ってけっこうオープンですよね。市民を信頼しないと成り立たない。よい市民であろうとするのは、べつに市長が怒るからじゃなくて、お互いの信頼で成り立っている。パブリックな場所でこういうことをするとこうなるよ、というのがあって、そういう中でだんだん行動が決まっていく。「コミュニティ・サイト」もそんな感じじゃないかと思うんです。

**内田**　悪人が追放される社会じゃなくて、むしろ悪人が自ら努力するなり周りから言われたりして変化していくという感じですか。

**近藤**　使っている人が、だんだん変化していくみたいなことが起こったらいいと思っています。「はてな」が提供しようとしているのは人の成長を促す装置なので、すごくいいことだと思うし、だから、あえてそういう人も追放したくないんです。実際に、子どもっぽいなというユーザーはいっぱいいます。でも、何回かやっているうちに行動が変わってきたりする。インターネットが登場してだいぶ経ちましたが、それでもまだ慣れていない人もけっこういる。だから、人とやり合ったときに、最初はうまくできないけれども、だんだん変わっていくみたいなのも見えたりするので、そういうのはある程度許容したいなというところはあります。度を超えたものはもちろんお断りしますけど。

**内田**　その考え方は、よく言われる「ネットが人間関係を壊す」みたいなのとは真逆ですね。

**近藤**　ネットは人間関係を壊すものなんですか。

**内田**　そういう話は結構ありますよね。例えば、いじめなんかにプロフ*2が使われる。するとプロフみたいなものがあるからダメなんだという論調が出てくる。

**平石**　学校裏サイトとか、書き込みとか。

**内田**　昔は個人的で限定的な交換日記ぐらいでやっていたことが、ある一定の人たちに公開することによって、いまはあいつがターゲットだということをはっきりさせる。そこから一律に、「ネットが人間関係を壊している」というふうに言う人もいると思うんです。新聞などでもそういう論調を見かけることがある。近藤さんの発想はそれらとは真逆だなと思って。

**近藤**　そうですね。いじめみたいな、より凶暴化したものは嫌ですけどね。炎上*3とかもよくありますからね。

**内田**　匿名性みたいなところで、普通の社会よりエスカレートしやすいというのはたぶんあると思います。でも、ネット自体がそれをもたらしたのではなくて、使う側の人間のこころの中にもあるのではないかと思うんです。

**近藤**　そうです。ネットに張りついて、何か面白い攻撃対象がないかと思っている人たち、とくに滞在時間が長い人はちょっと偏っていると思うんです。そういう人たちが、何か矛先を求めてうわーっと集まる感じは嫌だなと思うんですが、それは過渡的なことかなとも思っています。実社会というか、ネット以外のところで、豊かな人間関係が築けていたり、コミュニケーションをしたいという気持ちが満たされている人って、ネットに目的もなく行ったりしないと思うんです。そういう人たちの、いわゆる常識的な感覚がもっと入ってこないといけないと思っています。

　いま、ネットは危ないみたいな話で、そういう人を遠ざけようとしている。ネットは生活の中にどんどん入ってきていて、ツールとして使っているんだけれども、すぐ隣は危ないみたいな状態になっているのはおかしい。ごく当たり前に、「そんなことを言うのはおかしいやん」と言う人が増えればいい。その過渡期を越えようとしている僕たちの努力を止めないでほしいなという感じはあります。

**内田**　それはわかります。もっといろんな人が使えば、変化するとか、教育されるとか、変わっていくといった、普段起こっていることがネットの中でも起こるのではないでしょうか。

## ネットは進化する

**平石**　それがネットの中で起きるかどうかは、僕はちょっとわからない部分です。

**内田**　匿名だからですか。

**平石**　匿名だし、実社会では注意する人は物理的にそこにいるわけです。その人の言うことを聞かないと、具体的に何か自分が困るようなことになりかねない。でもネットの向こうの相手にどういうふうに思われようが、ある意味、自分に全然何も返ってこない。ネットの世界も１つのリアルな世界だと思うのですが、やっぱり物理的なリアルの世界とは違うものだという気がするんです。

　だから、ネットの世界で「おまえ、そんなことを言うなよ」と注意されて変われる人も多いと思うんですが、そうじゃない人がごく少数いたときに、その人が、大量に攻撃のコメントとかをガーッと送れてしまうということが、ネットというツールの、怖さとは言いたくないんだけれども、ある意味、怖さかなと。そこらへんは技術的なことで解決できると思うんですが。

**近藤**　システムは進化するんです。例えば、そういうことって、ミクシィ（mixi）*4の中では起こらなかったりしませんか。

**平石**　そうですね。匿名性ということもたぶんある。かと言って、完全に個人情報をだすことにすると、もうちょっと自由でいいというふうになりますしね。

**近藤**　ブログ*5のシステムが最終形態だとは全然僕も思っていなくて、人の行動も仕組みも過渡期だと思うんです。だけど、本当にそれが社会に要請されたものであれば、絶対に次の新しい仕組みが出てくるはずだし、それが広がるはずだと思う。ＳＮＳ*6が広がったのは、そういう側面があると思うんです。ある程度信頼できる人間だけがコメントを書き合うような世界のほうが一般人には受け入れられたという事実は実際

にある。だから、いまあるネットの仕組みが全部生き残るとは思わない。だけど、ＳＮＳはＳＮＳでちょっと閉じ過ぎていて窮屈だからというので、いままたブログに出てきている人もいる。そこに何か微妙な、みんなの動きみたいなものがあって、僕は世の中全体として進化しつつあるんだと思うんです。だから、一事業者としては、次に向かう仕組みをつくってみたいという興味を持って見ています。

ブログの１例（装幀家倉本修氏のWeblog作品集）

SNSの１例（兵庫県の地域SNS「ひょこたん」）

**平石**　確かに、すごく変わってきたんだろうなと思うのは、本当にありとあらゆる人がブログを書いている。言ってみれば日記を公開するようなもので、そんなのは昔は考えられなかったことです。そして、自分が思っている、それこそ「よしなしごと」を書いてみたらけっこう楽しくて、それに人のコメントがつくというのは面白いという発見があったのでしょう。

**内田**　私はいくつかの生活情報サイトを見ているんですが、社会的なやり取りがすごくあって、単に情報交換をしているだけじゃない。共感できるような書き込みが多くあるサイトもあれば、そうでもないサイトもあったりします。見ていると、発言の内容がそれぞれのサイト内で似通ってきたりと、どうやら棲み分けがなされて、一種の「カルチャー」が形成されているみたいです。その棲み分けは、ぱっと見ただけでわかるのが面白い。

たぶんそれは普通の人間関係と似ていて、グループに入るときに、「ああ、ここなら入れるかな」とか、「こっちはちょっと無理かな」というふうに吟味しますよね。そのときには服装とか立ち居振る舞いとか、いろんな情報を元にしているけれども、ブログや掲示板の書き込みなどの短いやり取りなんかでもけっこう手がかりになる。これはもしかすると進化してきたということなのかなと……。

**近藤**　進化していると思います。

**内田**　以前だったらできなかったことが、掲示板みたいなものが機能していくうちにできるようになったのかなという気がします。

**近藤**　例えば手紙でも進化したと思うんです。冒頭に「拝啓」と書くとか、作法みたいなことがある。電話でも、「もしもし、何々ですけど」と名乗って始めましょうみたいなのがありますが、たぶん最初は混乱があったと思うんです。ブログも、だんだんみんなの中で共通のルールみたいなのができつつある。

**内田**　新しいコミュニケーションをつくっていくとき、そういう過程があるのかもしれませんね。

## 新しいツールで<br>新しいコミュニティをつくる

**内田**　ネットを使うことについての世代差みたいなのはあるんでしょうか。もうちょっと上の世代には抵抗感があるのかもしれない。

**近藤**　そうですね。でも、そういうのを乗り越えれば、たくさんの人と、とくに自分と興味が合う人と出会えるのは基本的にはうれしいことだと思うし、自分が思いもよらない人から認められたりすることは嫌だと思う人は少ないんじゃないでしょうか。そういう機会を与えてくれるものとしての魅力が、だんだん勝（まさ）ってきているのかなという気がします。

**平石**　ローカル・コミュニティがなくなっちゃったので再生しないといけないみたいなことが言われるけれども、昔に戻そうというのは空しい話です。それより、この新しいツールを使って、新しいコミュニティをつくっていくほうが面白い。だんだんコミュニティがつくれる状況ができてきているところなのかもしれないなと思います。

**内田**　私は、研究者のコミュニティもそういう感じでつくれたらいいと思うんです。それこそ単に情報を検索するだけじゃなくて、ふと行きたいと思うようなコミュニティ。

**平石**　脳神経科学系の人たちなど、もともとコンピューターに強い人たちは、ブログで情報交換をしたり、かなり突っ込んだ議論をしたりしているようです。

**内田**　統計でも新しいツールが開発されたら、「みんなここへ意見を書き込んで」みたいなことをやっているようです。センターもそういうふうになればいいなと思っています。吉川センター長がよく「里山モデル」と言うように、まさにコミュニティですね。いろんな人がふらっとやって来て、研究をして、議論して、新しいものをそれぞれ身につけて去っていく。

**近藤**　それは場としてあるんですか。

**内田**　うちのセンターは、外から来た人が滞在することはけっこうあります。外国からもやって来て１～２カ月滞在して研究してもらう。あと、プロジェクトを一般公募して外部の人とセンター内部の研究者が共同する枠組みをつくってもらい、研究費を配分するなどしています。これからはそれだけではなく、ウェブ上でコミュニティをつくって、研究内容とか「こういうテーマでやってみたら面白いんじゃないですか」みたいなことを議論してもいいのかなと思います。

**近藤**　いいですね。「はてなグループ」を使ってくださいよ。僕は会社として１個グループを持っていて、さらに各チームとグループをつくってやっているんですが、かなりいいんですよ。メーリング・リスト*7とは全然違う。ぱっと来て見られるのと、見たかったら見てくれたらいいみたいな感じなので、あまり押しつけがましくない。だから、いっぱい書ける。

**内田**　それはいい。例えば、私たちはプロジェクトを複数の研究者で進めますが、なかなか全員で集まる機会を設けるのは難しくて、それぞれのプロジェクトがどこまで進行しているかが互いに見えなかったりする。ウェブ上のグループを使って、互いの進捗状況を知ったり、それに対してコメントを書き込んだりできればいいですね。

**近藤**　僕は毎朝、パソコンで10個ぐらいのグループを順番にばーっと見るのが日課です。みんながそこにそれぞれ自分の作業の進捗状況を書いているので、そこを見ればだいたいわかる。あと、はてな取締役のＵさんは、本を書くとき、編集者の人とグループをつくって、資料を持ち寄って、原稿もグループで書いちゃった。それを見ながら校正もしていたらしいです。

**内田**　それはすごくいいですね。

## 主のいないサイトはマスターの<br>いない喫茶店

**平石**　最近、学生とコミュニケーションをとるために、大学の授業でe-ラーニング*8を取り入れているところが増えています。ところが、学生の反応が乏しいということをよく聞きます。「授業で使ったスライドを置いておきますよ」というと、それはみんなダウンロードしているらしい。だけど、それ以上は広がらない。

**近藤**　ツールにしかなっていないんですね。

**平石**　そうなんです。なぜコミュニティができてこないのかな。

**近藤**　それは、主（ぬし）みたいなコアな人がいるかどうかなんです。

**内田**　主？

**近藤**　盛り上がるコミュニティと盛り上がらないコミュニティは、主がいるかどうかみたいなところがある。主のいないサイトはマスターのいない喫茶店みたいな気がします。

**内田**　なるほど。それはわかりやすい表現ですね。コアの人の性質には依存しないですか。

**近藤**　多少あるんじゃないかな。公平さとか、オープンさ、どういうふうにいろんなことが決まっているのか、どんな価値観があるのかみたいなことは、見えないよりは見えたほうが安心です。

**平石**　集団の力学を考えると面白い。ネットワークであろうと、顔を合わせてやろうと、基本は同じということが改めてよくわかる。それが人間の面白いところですね。

**内田**　社会心理学では、「集団」と「集合」は違うとよく言うんです。「集団」というのは、ある程度目的があって集まります。例えば、行列に並んでいる人は単なる集合体で「集団」ではない。ラーメンを食べたいという個人個人の意識だけであって、全体的なものは何もな

いんだけれども、「集団」になると、もっと全体的な目標みたいなものや指向性が生まれてきたり、１つの公正感やルールに則っていこうとする。ネット上の関係性もみんなが単にツールとして使う段階は「集合」で、ツールとして使う以上に、自分が何かコミットしてみようというふうになってくると「集団」になっていくのではないでしょうか。「集団」が「集団」らしくなるために、コアの人の力が必要なのかもしれないですね。

**平石**　コアな人のモチベーションはいったい何なんだろう。「協力の進化」を考えるとき、だれか１人、「とにかくおれは協力し続ける」みたいな変なやつが出てきたら協力が促進されるのか。そういう人のモチベーションはどうやって維持されるのかは考えてみてもいい問題だなと思います。

**近藤**　公務員みたいに、使命感のようなものがあるんじゃないですか。

**内田**　確かに使命感がないとね。

**平石**　ただ、使命感でおなかは膨れないですよね。どこかでその人がちゃんと利得を得ていないと、最終的には損をしてしまう。マスターががんばっているだけで喫茶店がもうかるわけでもないですよね。

**近藤**　それはいろんな幸せを感じる人がいて、少なくとも金銭的なことじゃないですね。でも、そういうことっていっぱいあるんじゃないですか。飲み会をすると幹事をやってくれる人とか。

**平石**　幹事がどうやってそこから何かを得ているのかというのは、考えないといけない話かなと思います。メンバーにコアを置くことでどうやって協力が立ち上がり得るのか。

**近藤**　感謝という要素があるのと、１人ではできないことをやった達成感みたいなものがある。

**平石**　一番わかりやすいのは感謝ということで、その人が困っていると、みんなが助けてくれることでちゃんとペイしていることになるんだろうな。

**内田**　ある研究で、ずっと協力し続ける人と、やってもらったときだけやり返す人と、全然協力しない人みたいなのを分布させた。普通だったら、やってもらったときだけお返しする人が一番強いはずで、ずっと協力しているお人よしさんは消えていくんじゃないかと思いますが、何回もやってみたら、常に一定数のお人好しさんが生き残ったそうです。もしかすると、こんなお人よしさんが一生懸命がんばっているんだから、何か支えてやろうみたいな人が出てくるのかもしれないと思うんです。そういう人たちがいないと、集団としてはうまく機能しないみたいなこともあるかもしれない。

## 一番高い次元の喜び

**近藤**　社会的な正義というか、正しいことをしようみたいなことって、あるんじゃないですかね。

**平石**　それは間違いなくあると思うんですが、例えば、それがニホンザルにあるかといったら、たぶんないだろう。なんで人間にはそういうものが生まれてきたのかを考えたい。

**近藤**　人の喜びを自分の喜びにするのが一番高い次元の喜びという感じじゃないですか。

**平石**　人間にはそういうところがありますね。

**内田**　役に立っている喜びみたいなものですね。

**近藤**　「自分は１回死んだ、後はほかの人のために尽くす」みたいな境地に達している人を見ると、自分の生への執着みたいなものを超越しているような人がたまにいるなという気はします。

**内田**　そういう人を見たとき、周りの人が、何かお返しをしたいと感じるのではないのでしょうか。その人に直接にではなくても、その集団全体に。それで、犠牲になって身を粉にして働いている人がいると、集団全体の利益が上がるんじゃないでしょうか。それは「共感」する人間だからこそできることであって、例えば１匹のニホンザルが一生懸命イモを洗っていてもたぶん他のサルは何も思わない。あの人はいろいろ苦労しているんだろうなとか、時間を割いて考えているんだろうなと背景を読み取ったり、共感するからこそ、そこに心理的負債感みたいなものが生まれて、自分も何かしてあげなきゃいけないという人が一定の確率で増えるんじゃないでしょうか。

**森崎**　自分も同じように行動したいというような気持ちが生まれるのかもしれないです。

**近藤**　犠牲に対しては、ある種の感動みたいなものを感じますよね。

**内田**　犠牲は人を動かす力がある。犠牲みたいなことがテーマになった映画とか本がこれだけ世の中にたくさんあるのを見ると、やっぱりそれが何らかの形で人を動かす原動力になっていると思うんです。それを読んで、自分もそれと同じようなことをやってみたいというモチベーションになったりする。『アルマゲドン』という映画がありましたね。

**平石**　地球に接近する隕石を爆破させようとして、自分だけ残って、娘の婚約者を無理やりロケットに押し込んで、「おまえは帰れ。おれは１人で行く」。そういう見返りを期待しない犠牲というのはあると思うんです。それがなんであるのかは、進化のモデルを考えるとき、ずっと謎になっています。人間は大昔はすごく小さなグループで暮らしていた。まったく見知らぬ人が存在するというのは、人間の進化でみると、ものすごく最近の出来事だから、そういうところに人間のこころが追いついていないんじゃないか、そういう理屈で話をすることもあります。けれども、実はそういう人を中心にして協力的なグループができる、そういう力学が昔から存在してきたのかもしれませんね。

**近藤**　時間軸が長いだけなんじゃないですかね、報酬を求めるスパンが。例えば、昔の偉人で、そのときだけを見たら、なんでそんなことをするのかよくわからない人がいっぱいいる。キリストだって、なんで死ななきゃいけないの、みたいなことがある。でも、そういうのが歴史に名を残すというか、死んだ後も、いいことをしたとずっと言われ続ける。積算するとそのほうがすごい量をもらっていると思う。そっちに価値を見いだせば、純粋にペイしているという感じがします。

　僕も生きているうちはそんなに取り返せないというのがわかっていても、死んだ後に称賛されるようなことができたらいいと思うんです。だから、「はてな」のネットサービスで、いま流行（はや）っているものをつくって１年だけやればヒットするというアイデアもいっぱいあるんですが、そういう刹那的なものはやりたくなくて、ある程度普遍的な価値のあるものを手がけたいと思うんです。

**内田**　でも、そういうスタンスでやっていると、すぐには結果が出ないことがあるでしょう。

**近藤**　あります。

**内田**　潰されていくみたいなことはないですか。もしかしたら10年後には芽が出るものかもしれないのに、いまはあんまりもうからないとかいって。

**近藤**　それは、すぐには数字が上がらない。だから、けっこう「はてな」のやっていることは、本当にこのやり方でいずれ大きくなっていくのか、日々考えて悩んでいるところです。

**内田**　それは研究とも似ています。研究費はすごく短いターム、３年とかで成果を出さないといけなくて、出なかったら打ち切られる。これは本当に苦しくて、とくに基礎研究とか社会科学系みたいなものはすごく長いスパンで考えないと、みんなに引用される論文とか、後に残るような本を書いたりするのが難しい。

**近藤**　それは無理やりやるしかない。

**内田**　自分がずっと抱えているものと、結果が割合に短時間でクリアになるものをバランスよく統合させるということも必要なのかもしれません。

**近藤**　いま、「はてな」のユーザーはすごい勢いで増え続けているんです。増えるペースがどんどんあがっているので、ある程度価値のあること、一時の流行りじゃないものを見極めてやってきたのかなとは思っているんです。そうやってつくっているものが、ヒトの進化みたいなものの最前線だったりする。べつに自分の名前が残るのでなくても、最前線の仕組みが「はてな」のプラットフォームの上で起こった。それが何かしらの形で残り続けている、みたいな状態があればうれしいという気持ちでやっています。

**内田**　それはすごくよくわかる気がします。

## つながりのなかに浮かぶこころ

**平石**　人間にはこころがあることになっていますが、本当にあるのかなんてよくわからないし、自分のこころのことだって、わかっていなかったりするわけです。

　時間感覚ですら、自分が物を取ろうと思ってこれを取ったんだと言っているけれども、自分が取ろうと思う前に、脳の中では取るための運動信号が出ているということもある。そうすると、自分の意識ってどの程度のものだろうと思うんです。自分らしさという意味でのこころというのは、社会的につくり上げられている一種のイリュージョンなんじゃないかなという感覚が僕の中にはある。

**近藤**　逆に言うと、人との間につながっていたりしないんですか。

**平石**　つながっているんだと思います。

**近藤**　つながっている。じゃ、１個ですか。

**内田**　１個というより、もっとネットワーク的なつながりじゃないですか。

『アルマゲドン』（DVD 発売中、発売元：ウォルト・ディズニー・スタジオ・ホーム・エンターテイメント）

**近藤**　でも、現実には孤立しているネットワークはないですよね。こころがある身体の中に閉じ込められた何かじゃないということになると、１個じゃないですか。

**内田**　１個というと、平板で、全部同じ色みたいな感じがしちゃうけれども、濃度が違うという感じを出したい。例えば、１枚の葉っぱでも色が微妙に違いますが、それと同じように濃度が違うと思います。

**平石**　例えば、平石界という人間は、ここをピークに存在していて、グラデーションがかかっていて、アマゾンの奥のほうにいる人のところまでつながっているかもしれない。でも、そこにある平石界の残像は、すごく薄いだろう。そういういろんなピークというか山があちこちにぴょこぴょこあって、それをその人の「こころ」と呼んでいるだけではないか。実は全部つながっているということですね。

**内田**　前提として、一応境界をつくるみたいなものですよね。例えば、平石さんをアマゾンに探しに行ってもいないということは、一応前提にしてやっている。

**平石**　だけれども、濃淡があって、つながりがなくなってしまったら山もなくなっちゃう。

**近藤**　つながっているって面白いですね。あと、成長していないと意味がないというか、変化していく。

**内田**　そう、だから濃度も変化するし、つながりも変化する。例えば、２人が知り合いではなかったときにはつながりは薄かったんだけれども、知り合いになったとき、その山のつながりみたいなものの濃度が濃くなる。そうすることで、お互いにまた別の変化をするということがあり得る。こころって個人の中に入っているというイメージがあるけれども、私はあまりそういう感じでもないと思います。

## 街のこころ、人のこころ

**近藤**　そうすると、「街のこころ」みたいなものも考えられる。

**平石**　街のこころというのも、ある程度の集合ができると、あるのかなという気がします。僕は『攻殻機動隊』という漫画がすごく好きなんですが、あの漫画には「人形遣い」というテロリストが出てくるんです。この「人形遣い」はネットワークの中から生まれた「こころ」なんです。人間がみんな自分の脳みそを機械化して、自分の意識がネットワークと直結するようにした。すると、ネットワークの中から新しいこころが生まれてきたという発想をしていて、作者の士郎政宗という人はすごいなと思いました。街のこころというのも、それと同じようなものかもしれない。

**内田**　私は文化心理学で文化とこころみたいなことを研究しています。そういうときのモデルは、もともとこころが内側にあって、文化が外側にあって、そこでインタラクションしているみたいな話になるんですが、私はあまり境界がそこらへんにはないような気がする。まさに街のこころみたいなものがあって、そこに濃い・薄いがある。京都で長年暮らした人の京都人らしさみたいなものと、よそから移り住んで来たばかりの人の京都人らしさはたぶん違うんだけれども、そこに連続性はあるみたいなことを考えたいのです。でも、いざ実験をしようと思ったら、どこかで切らないといけない。この人たちが京都の人たちですよ、この人たちが東京の人ですよ、とやらなきゃいけないという面がある。だから、こころの研究もどうしてもぶつ切りになって、個人の動きとか、個人の脳の中身だとか、個人化される。しかし、本当はそうじゃないモデルのほうが説明できることはけっこうあると思います。

**近藤**　そういうのはモデル化されていないんですか。

**内田**　なかなか難しいです。

**近藤**　そうなんですか。でも、すごく納得感があります。僕は会社を京都とか東京とかやたら動かしているんですが、街の雰囲気みたいなものに敏感で、東京ではなかなかうまく物をつくれなかったんです。でも、アメリカに行ったとき、「こんな感じだったら、ベンチャー企業もいっぱい生まれるわな」とすごく思ったんです。人が何かに挑戦しようと思ったら決して批判しないし、「おまえなら絶対にうまくいくよ」なんて言い続ける文化がありますから。ああいう雰囲気は面白いなと感じました。京都は京都で、放っておいてくれる感じでそれもいいんですけれども、長い時間いると明らかに違いを感じるものは何なのかと思います。

士郎正宗『攻殻機動隊１』（講談社）表紙（© 士郎正宗／講談社）

**内田**　その話とは逆に、授業で「文化とか社会とか、状況によってこころは影響されるものです」みたいなことを話すと、学生から「そうしたら、本当の私はどこにあるんでしょう。怖くなります」という意見がけっこう出るんです。たぶんみんな、こころのモデルとして「本当の私」がどこかにあってほしいという願いがあるんです。そうしないと、怖い。自分が生きている意味が見えなくなるという感じがするんだと思うんです。でも、実はつながっているというところに意味があるかもしれなくて、本当の私みたいなものを守らなくても大丈夫だよと言ってもいいと思うんですよね。もちろん年齢によって、「本当の自分は何だろう？」みたいなことを考えるときもあって、どこかにあるはずだという前提がないと怖くなっちゃうというのはよくわかりますけれどもね。

**近藤**　歳をとると社会性みたいのが増していくから、そんなふうに思うのかもしれない。

## 小中学生のネット・コミュニティの可能性

**近藤**　「はてな」で最近「うごメモはてな」というのが始まりました。これは小中学生のコミュニティで、それまでのものと相互にあまり行き来がなくてちょっと別なんです。例えば「はてなスター」というのがあります。ブログのエントリーが面白かったらつけたりするんですが、子どもたちが入ってくる前は、だいたい１日で全員で５万個ぐらいしかつかなかったんです。それが「うごメモはてな」が始まったら、１日に300万個ぐらいつくようになったんです。

**内田**　それは、子どもたちがたくさんスターをつけちゃうということですか。スターのインフレじゃないですか。

**近藤**　すごくインフレになっている。まったく違う価値観で、１人が連打して星が何十個もついたりする。非連続性があって面白いですけどね。

**内田**　面白い。ルールが違うんですね。

**近藤**　全然違います。「はてな」がこういう機能をつくりましたよといったときに、反応してくれるユーザーさんの温度感、反応のしどころみたいなものが全然違うのを感じます。

**内田**　街が違う。

**森崎**　小学生でも最初のころの星のつけ方と、だんだんルールを学習してからでは変わってくるんですか。

**近藤**　そうですね。

**森崎**　いま、子どもたちはどれぐらいの時期なんですか。初期は済んだんですか。

**近藤**　初期というのはどこまでかわからないですが、「うごメモはてな」は、ニンテンドーのＤＳｉ*9でも参加できるんです。それでインターネットに初めて接し

「うごメモはてな」トップページ

「うごメモはてな」で遊ぶ子どもたち

たという子どもたちがかなりいると思います。小学校の高学年は、ようやく携帯電話を持つか持たないかぐらいですね。携帯でメールをしたりというより、お母さんに電話をするぐらいしか使っていないような年代だと思うんです。そういう人が、ＤＳｉというゲーム機で絵を描いて、世の中のみんなが見られる場所に投稿するというのは、たぶん生まれて初めてのネット体験だと思います。だから、最初は、コメントがぎくしゃくしたり、こんなことをするのかというようなことをする人がいました。

**内田**　例えば？

**近藤**　すごくびっくりしたのが、普通に考えたら、絵を描いてネットに投稿するなんて、すごく敷居が高いと思うじゃないですか。例えば、「はてなダイアリー」というブログでも、書く人と見にくる人の比率って１対20ぐらいなんです。そんなに書く人は多くなくて、見るだけの人が多い。ところが、「うごメモはてな」では全体の４割ぐらいの人が自分で絵を描いて投稿しているんです。そんなこと想像もしてなかった。すごく投稿が多くて、小学生が、可愛い女の子の絵を描いてポンみたいな感じで送ってくる。

**内田**　それは好奇心？

**近藤**　ですかね。それでいままでとは別のインターネットみたいな感じになってきています。全然インターネットを知らなかった人たちがどっと押し寄せてきて、そこで、いわゆるインターネット的なやり取りじゃなくて、その人たち同士で作品をコピーして返事をしたりとか。勝手にオープンな形で交換ノートみたいなのを始めちゃったりとか。

**内田**　それは知らない人同士でも？

**近藤**　そうそう。どんどん新しくやり始めるんです。そういうのを見ていると、昔インターネットが始まったころの様子をプレイバックして見ているような感じになってきたんです。まだまだ新しいことがどんどん起こる感じがするので、かなり面白い状況だと思います。

**森崎**　新しい世代のモデルができつつある。新しいコミュニケーション・ルールを作り上げて身につけるだけではなく、ネット時代の新しいこころの成長の仕方まで生まれてくるかもしれないですね。

**近藤**　ある程度コントロールされた中で、楽しい体験とかもいっぱいやって、多少失敗したり嫌な思いをしたりというのはあるかもしれない。でも、そんなにひどいことは起こっていないと思うんです。そういう中で、行動のルールみたいなものを身につけていって、そういう人たちがネットの新しい使い方を生み出し、楽しくネットをやっているうちに、ある程度称賛し合うとか、そういうカルチャーをどんどん築いてくれるとうれしいなと思います。

**内田**　最初から怖いものだと思って入るのと、そういう楽しい経験から入るのは全然違いますね。「うごメモはてな」をやった人たちが、これからどういうふうになっていくのか興味深いです。

**平石**　そういう世代が本当に世界とつながった形でインターネットを使えるようになっていくのかもしれませんね。

**注**

1　ヤフー、グーグル
yahoo!、googleともアメリカ合衆国のインターネット関連サービスの提供を行う企業で、世界最大級のインターネット上の検索エンジンを運営する。その日本版は多数の利用者がある。

2　プロフ
携帯電話やWeb上で利用される、自分のプロフィールを作成して公開するサービス。

3　炎上
インターネットの掲示板などに、非難や誹謗中傷、あるいは趣旨と無関係な書き込みが殺到し、本来の機能が働かなくなること。

4　ミクシィ
株式会社ミクシィが運営するソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)。現在1500万人以上が登録している。すでに入会している登録ユーザーから招待を受けないと利用できない。

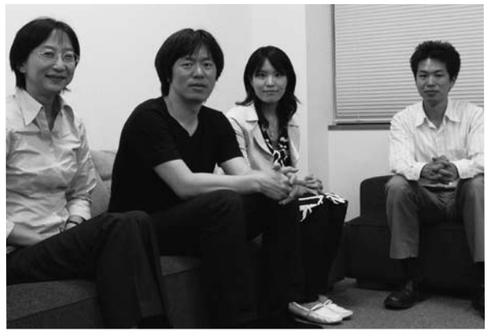
5　ブログ
比較的頻繁に更新される日記形式のウェブサイト。ブログはウェブログweblog（造語で「ウェブ上の記録」のこと）が短縮されたもの。

6　SNS
ソーシャル・ネットワーキング・サービス(social networking service)の略。人と人とのコミュニケーションを促進し、社会的なネットワークの構築を支援するインターネットを利用したサービスのこと。

7　メーリング・リスト
同じ電子メールを複数の人に同時に配信する仕組み。共通のテーマに関心を持つグループの情報交換などに利用される。

8　e-ラーニング
“e”はelectronic（電子的な）の略で、インターネットなどの情報技術を用いて行う学習のこと。

9　ニンテンドーDSi
ニンテンドーDSiは、任天堂が開発・販売している携帯型ゲーム機。無線通信機能をもち、インターネットに接続できる。





## センターの動向（2009.4～2009.9）

●2009年４月１日、人事異動がありました。久保（川合）南海子助教が、愛知淑徳大学に転出しました。森崎礼子さんがセンター助教に着任しました。

●４月23日、こころの未来講演会を開催しました（於：京都大学大学院人間・環境学研究科棟地下講義室）。David Hansel教授（Universite Paris Descartes）が“Balanced Spatial Working Memory”というタイトルで講演しました。

●５月１日、人事異動がありました。番浩志助教が、英国バーミンガム大学心理学部リサーチフェローとして転出しました。後藤和宏さんを特別研究員として採用しました。

●５月15日、2009年度第１回こころ観研究会を開催しました（於：稲盛財団記念館大会議室）。講演は長谷川敏彦氏（日本医科大学）「人類未到の超高齢化社会」、末木文美士氏（国際日本文化研究センター）「死者から構築する哲学」、司会は鎌田東二教授。

●５月19日、Steven Heine教授（ブリティッシュコロンビア大学）による院生、学部生を対象としたインフォーマルな講演会を開催しました（於：稲盛財団記念館３階小会議室Ⅰ）。タイトルはThe Weirdest People in the World: The Inductive Problem for Psychology。

●５月21日、こころ学ブログに新しい記事を掲載しました。「笑顔とインフルエンザの微妙な関係」平石界助教。

●６月７日に高槻市総合市民交流センターにて、内田由紀子助教による講演会「漂流する若者たち：日本社会における対人関係の結び方とこころの健康」が開催されました（主催：NPO法人高槻オレンジの会）。

●６月８日～、海外からの研究者・大学院生がセンターに滞在して下記の研究を行っています。宮本百合さん、University of Wisconsin, Assistant Professor、センター連携研究員、研究テーマ：認知的文化差の基盤に関する研究、期間：５月27日-７月７日。Brooke Wilkenさん、University of Wisconsin大学院生（日本学術振興会サマープログラム参加外国人研究者）、研究テーマ：①選択（または好み）における文化差、②コミュニケーションにおける知覚に関する文化差、期間：６月１日-８月25日。今田俊恵さん、University of Minnesota、ポスドク研究員、研究テーマ：価値観による記憶・視聴覚情報処理の文化比較、期間：６月２日-８月上旬。

●６月10日、2009年度こころの未来特別レクチャーを開催しました。講師：下條信輔先生（カリフォルニア工科大学）、演題：心は孤立していない～Towards Inverse Translational Sciences。

●６月25日、現在センターに滞在している研究者、学外からの発表者を招いて、クローズドでの「文化心理学ワークショップ」を開催しました（於：稲盛財団記念館３階小会議室Ⅰ）。これは文部科学省特定領域研究「実験社会科学―実験が切り開く21世紀の社会科学―」の助成を受けて行われました。発表者は、Hyekyung Park（Hokkaido University）、Keiko Ishii（Hokkaido University）、Yukiko Uchida（Kyoto University）、Rie Toriyama（University of Toronto）、Toshie Imada（University of Minnesota）、Yuri Miyamoto（University of Wisconsin-Madison）、Brooke Wilken（University of Wisconsin-Madison）、Kosuke Takemura（Kyoto University）。

●６月27日、第４回こころの広場（京都府との連携事業）を開催しました（於：京都大学稲盛財団記念館３階大会議室）。タイトルは「医療が治せない病～老病死のこころのケア」で、第一部は「老病死のこころのケア」と題して、大下大圓氏（京都大学こころの未来研究センター研修員、飛騨高山千光寺住職）、カール・ベッカー教授の講演、第二部は座談・質疑応答で、司会進行は平石界助教。

●７月２日、2009年度第２回こころ観研究会を開催しました（於：稲盛財団記念館大会議室）。松本直子氏（岡山大学・認知考古学）「考古学におけるこころの問題：認知考古学の挑戦」、司会は鎌田東二教授。

●７月９日、ソーシャルネットワークのプロジェクトで、普及指導員を対象とした調査を行っています（協力：近畿農政局、近畿ブロック普及活動研究会）。

●７月15日、ベッカー教授は皇太子明仁親王奨学金財団より「ラルフ・ホンダ特別功労賞」を受賞しました。皇太子明仁親王奨学金は、両陛下の結婚を記念して、ホンダ氏を初めとするハワイの日系人が設立し、日本とハワイの双方から留学生を毎年交換させるものです。ベッカー教授はアメリカ代表として選ばれました。

●７月29日、こころ学ブログに新しい記事を掲載しました。「虚空を見つめて」池田功毅氏。

●７月31日、こころの未来講演会を開催しました（於：京都大学大学院人間・環境学研究科棟地下講義室）。講演者はDaeyeol Lee 准教授（Yale University School of Medicine）で、講演タイトルは"Single neurons and decision making in the primate brain"。

●９月10日、鎌田東二教授の著作が出版されました。『神と仏の出逢う国』角川学芸出版。

●９月15日、河合俊雄教授の著作が出版されました。 谷川俊太郎・鷲田清一・河合俊雄編『臨床家 河合隼雄』岩波書店。河合隼雄（河合俊雄・田中康裕・高月玲子訳）『日本神話と心の構造』岩波書店。

# 京都府との共同企画事業報告

鎌田東二 Toji Kamata
（こころの未来研究センター教授）

船橋新太郎 Shintaro Funahashi
（こころの未来研究センター教授）

2008年度は、京都府とこころの未来研究センターとの共同企画事業として、「こころの広場」を３回開催し、シンポジウムを１回（「平安京のコスモロジー」）行った。

## 「こころの広場」第1回

日時：2008年 6 月22日13時 ～ 16時半
場所：京都府庁本庁舎正庁
演題：「こころと里山」
講演者：高林純示（京都大学生態学研究センター長）
湯本貴和（総合地球環境学研究所教授）ほか
参加者：75名

第１部では、化学生態学者の高林純示京都大学生態学研究センター長が「植物のかおりが織りなす生き物ネットワーク」と題し、京都府の農家での試験事例などを交えて講演した。高林氏は害虫の被害を受けた植物が匂いを変えることで、害虫を退治する天敵（ボディガード）を呼び寄せる情報を発信しているメカニズムを突き止め、里山の植物が自己防衛システムを張り巡らせていると指摘。香りを放出する装置として、「ハチクール」などの誘引剤の発明と使用の事例をわかりやすく、ユーモラスに語った。

第２部では、植物生態学者の湯本貴和総合地球環境学研究所教授が「花や果実で動物を操って生きる植物たち」と題し、共生と里山の概念と構造、および生物の共進化や相利共生の仕組みを語った。湯本氏は、日本の里山を、水田耕作を持続的に行い、生態系サービス（自然の恵み）を得るために改変した自然であると規定し、里山が生き物のゆりかごであると指摘。また雑木林の残る里山こそ日本が誇るべき生物多様性の場であるとし、コウノトリなどの野生動物の生息が安全・安心の指標として機能することに注意を喚起した。

第３部では、総合討論「こころと里山――人々は里山をいかに作ってきたのか？」を行い、「こころ」を「里山」と関係づけながら、人間と自然環境との相互作用について討議。多様性や間接的相互作用という生態学での重要概念は、「こころ」の問題を考えていく際にも大きなヒントを与えてくれる。自由や自立・自律と関係性などを生態学をモデルとし鏡として考え直すことができ、メタファーとして、「こころの里山」あるいは「こころの生態学」をイメージすることで、こころの未来研究センターの活動のヒントとなるだろう。（鎌田）

「第１回こころの広場」会場風景

「第２回こころの広場」森下一氏と桑原知子氏

## 「こころの広場」第2回

日時：2008年９月28日13時～17時
場所：京都文化博物館
演題：「引きこもりと教育臨床」
講演者：森下一（森下神経内科診療所所長）
桑原知子（京都大学大学院教育学研究科教授）
参加者：80名

精神科医の森下氏は「引きこもりの子どもたちと向き合って」と題して講演し、臨床心理学者の桑原氏は「学校カウンセリングと心理臨床」について講演した。

森下氏は、戦後の子どもたちのこころの変化を児童精神医学の立場から説明し、子どもが元気になれず、不登校や引きこもりになり、自分を責め、悲しみ、暴力を振るったり、自分を攻撃する姿を臨床経験から報告した。見守ってくれる人の存在、良き人と出会うことの大切さ、こころの中心に聴くことなどを、生野学園の創立や鎌倉てらこやの活動を通して語った。

桑原氏は、「花が存在する」のではなく、「存在が『花する』」という存在論を取り上げ、「存在」がたまたま「花する」という存在認識は発想の転換で、不登校や引きこもりはなくすべきかという問いにもつながる。人間には自己変容性（自己治癒力）、多様性、関係性があり、物についた傷は決して治らないが、人間の傷は治る。その不思議さ、また見守ること（関心を持つが、手を出さないこと）、信じること、待つことの重要性を語った。（鎌田）

## シンポジウム「平安京のコスモロジー」

日時：2008年11月30日13時～18時
場所：芝欄会館稲盛ホール
講演者：岡野玲子（漫画家）
内藤正敏（写真家・民俗学者、東北芸術工科大学教授）
河合俊雄（こころの未来研究センター教授）ほか
参加者：227名

基調報告者として、漫画家の岡野玲子氏が「陰陽師から見た平安京」、写真家・民俗学者で東北芸術工科大学教授の内藤正敏氏が「平安京の宗

「平安京のコスモロジー」会場風景

教構造――江戸・東京との比較の観点より」、臨床心理学者の河合俊雄こころの未来研究センター教授が「京都の癒し空間」を問題提起。パネルディスカッションでは、鳥居本幸代氏（京都ノートルダム女子大学教授、平安京文化研究）が「平安京の食とファッション」、原田憲一氏（京都造形芸術大学教授、地球科学・地質学）が「平安京の自然学」、中村利則氏（京都造形芸術大学教授、建築史・茶室研究）が「京の茶室とわび・さびの美学」、関本徹生（京都造形芸術大学教授、アーティスト）が「京の妖怪」を語り、討議した。なお、本シンポジウムの企画は、こころの未来研究センターの科研：モノ学感覚価値研究会と京都における癒しの伝統とリソース研究プロジェクトが担当し、京都造形芸術大学比較藝術学研究センターが後援した。

日本史の中でもっとも長く、千年を越す都が置かれたのが京都・平安京であるが、その平安京長期持続力を、水の都、祈りの都、芸術・技芸・ものづくり文化の都、里山盆地の都という４つの特質や、物質的基盤（水、食料、燃料、材木、ゴミ問題、人の流れ）と精神的基盤（宗教、象徴性、呪術性、霊性）と技術的基盤（芸術、技芸、学問）という３つの基盤など、自然・生態・宗教・文化の諸観点から解明しつつ討議。このシンポジウムの記録『平安京のコスモロジー』は、2009 年 11 月に創元社より出版予定である。（鎌田）

## 「こころの広場」第３回

日時：平成 20 年 12 月 6 日 14 時～ 16 時半
場所：稲盛財団記念館3階大会議室
演題：「脳科学と社会の関わり」
講演者：川人光男（国際電気通信基盤研究所〈ATR〉脳情報研究所所長）
参加者：120 名

最近は脳ブームと言うべきか、脳についての話題がいろいろな所で取り上げられることが多くなった。「脳科学者」と称する人たちが、様々なマスコミを通して「最先端の脳研究の知見に基づく」ユニークな学習法や育児法、あるいは脳を活性化する方法を解説されるのを目の当たりにする。脳研究を地道に行っている者からは、「どうしてそんなことが言えるのだろうか」と思うような発言もよく耳にする。

このような脳科学ブームの中で、本当の意味での脳研究の第一人者であり、特に理論神経科学および工学的な観点では世界の脳研究を牽引する１人である国際電気通信基盤研究所（ATR）脳情報研究所所長の川人光男先生に講演をお願いした。

川人先生は小脳における運動調節機能に注目し、その学習モデルを提案すると同時に、そのモデルを利用することにより、ロボットが学習により様々な行動を獲得することができることを明らかにしている。当日は、このモデルの話を皮切りに、ロボットによる行動の学習のようす、さらには、最近川人先生のグループが取り組んでいる脳・機械インターフェイス（brain-machine interface, BMI）の研究まで、脳の働きに関する基礎的な研究から、その成果を応用した最近の研究、そしてこのような研究により生じる倫理的な問題まで、脳研究の最前線で行われている研究とその社会との関わりについてお話ししていただいた。（船橋）

「第３回こころの広場」会場風景

## 編集後記

「研究者は、未来について語るのが苦手ですね」。患者志向（patient-oriented）の研究の重要性を語られた井村先生のこのことばが強く印象に残っています。医学（からだ）の世界と心理学（こころ）の世界は密接につながっています。「誰に向けての研究なのか」。このことをはっきり自覚することで、こころの学問は今よりももっと、人間志向の学問に育つはずです。そうなれば、研究者も未来を語ることに臆さなくなるでしょう。（吉川）

第３号が仕上がった。今号も大変充実していると思う。それぞれ読み応えがあり、考えさせられる。そして楽しく、活力が湧いてくる。こころの未来がどこか、見えてくる感じ。原稿あるいは座談会にご寄稿・ご協力いただいた先生方、本当にありがとうございました。おかげさまで、力強い誌面を作ることができました。これを、日々の研究・教育・実践活動につなげていきたいと思います。（鎌田）

皆さまのお陰をもちまして第３号も無事に完成しました。今回はわたしも座談会に出させていただきました。こういうものは本来、功成り名を遂げた方がするものとの思いもあって肩に力が入り、特に「はてな」の近藤社長との座談会ではずいぶんと意味不明な発言もしてしまいました。他の方々が良いことをおっしゃっていることに免じて、ご勘弁いただければ幸いです。（平石）

本誌は原稿を書かれた先生、座談会に出席していただいた先生など、多くの先生方の高いエネルギーが結集する場なのだと思います。その場のエネルギーをストレートに読者の方にお届けしたいと思って編集を進めておりますが、お気付きの点などございましたらお知らせいただければ幸いです。最後に、お力添えをいただいた先生方、本当にありがとうございました。（原）

こころの未来 KOKORO RESEARCH CENTER KYOTO UNIVERSITY　３号

| | |
|---|---|
| 発行日 | 2009年９月30日 |
| 発　行 | 京都大学こころの未来研究センター<br>〒606-8501<br>京都市左京区吉田下阿達町46<br>京都大学稲盛財団記念館内<br>電話　075-753-9670<br>FAX　075-753-9680<br>http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/ |
| 表紙写真 | 大石高典 |
| 編集・制作 | 編集工房レイヴン　原　　章 |
| デザイン | 鷺草デザイン事務所　尾崎閑也 |
| 印　　刷 | 株式会社NPCコーポレーション |